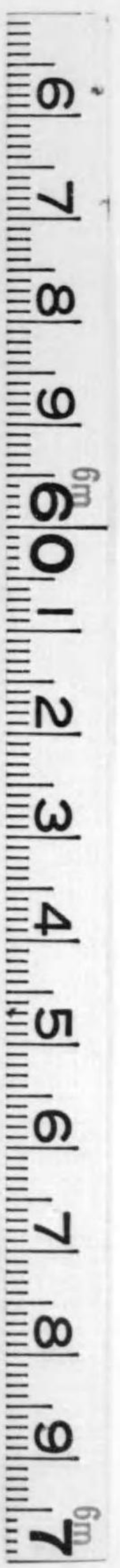


56  
171



始



NI 30-3

56-171



安

産

の

友

醫學士 佐久間兼信



大正

10 8. 5

内交

### はしがき

一、家庭において一般に醫學的智識のないために、起さずとも濟むべき病氣を豫防し得なかつたり、早く治し得べきものをも、手遅れのために大事に至らしむるやうなことは、世間に往々見るところで、殊に妊娠、分娩、育兒に關して、一層その感が深いやうであります。

一、妊娠および分娩は固より生理的の機能ですから、自然にまかせて差支はないうやうなもの、然し一度その攝養の途を誤りますと、容易に病的の状態に陥つて、母子兩者の健康を害ひ、甚だしきはその生命を失ふやうなことになるります。

一、それ故この書物は、如何にすれば妊娠を無事に經過し得るか、また何うすれば安全に分娩し得るか、或はまた産後の肥立ちをよくし、且つ初生兒を恙なく育てるには、如何にすべきかと云ふことを、成るべく専門的學理を避けて、極め

て平易に述べたつもりです。

一、然しみだりに病的の話を書いて、讀む人をして徒らに恐怖の念を懐かしむるのは考へものですから、その點には大に苦心しました。警告するには勢ひ多少の恐ろしき事實をも、叙述するの已むなきに至つた點もあります。それ等の異状は無論稀に來るべきもので、相當の注意をすれば通常免れ得べきものとして、徒らに杞憂を懐かないやうに、諒解されんことを希望します。

一、本書に收むる所の大半は、曾て『婦人之友』誌上に連載したもので、それを順序立て、前後にしたのです。従つて記事の所々に重複した點もありませうが、この點は讀者の御諒察を願ひます。同時にこれに就て『婦人之友』記者の、多大の援助を受けたことも、申添へて置く必要があると存じます。

大正十年五月

佐久間兼信

## 目次

### 月經篇

第一章 月經とは何んなものか	(一)
月經は何時から始まるか	(二)
月經は何時まで続くか	(四)
第二章 何んな風にして受胎するか	(八)
腹は借りものではない	(八)
卵子はこんなもの	(九)
受胎の場所は何所か	(一〇)
第三章 月經は何故來るか	(一八)
月經と妊娠との關係	(一八)
月經がなくとも妊娠し得る	(二二)
妊娠中にも月經がある	(二三)
第四章 月經中の養生法	(三一)

精神上の休養	.....	(三)	月經中沐浴の可否	.....	(三)
肉體的の養生	.....	(三)	月經中の食物と服藥	.....	(三)
月經時の手當	.....	(三)			
<b>第五章 月經の異常とその心得</b>	.....	(三九)			
早期月經	.....	(元)	無月經の手當	.....	(四)
月經と婦人科病	.....	(四)	月經過多症	.....	(四)
無月經	.....	(四)	月經過多症の原因と手當	.....	(四)
代償月經	.....	(四)	月經困難	.....	(五)
有つて見ない月經	.....	(四)	月經困難の原因と手當	.....	(五)
<b>第六章 更年期の注意と子宮癌の警告</b>	.....	(五)	痛は不治の病にあらず	.....	(五)
更年期の養生	.....	(五)	子宮筋腫	.....	(六)
脱落現象	.....	(六)			
子宮癌	.....	(六)			
<b>妊娠篇</b>					
<b>第七章 妊娠中は如何に注意すべきか</b>	.....	(六四)	想像妊娠	.....	(六)
最初の注意	.....	(六四)	妊娠中の食物	.....	(七)
醫師と産婆	.....	(六)			

妊娠中の仕事	.....	(七)	入浴その他の注意	.....	(七)
妊娠中の旅行	.....	(七)	不注意の實例	.....	(七)
<b>第八章 醫學上より觀たる胎教</b>	.....	(七)			
お産に關する迷信	.....	(八)	遺傳の研究	.....	(八)
傳説の價值	.....	(八)	母體と胎兒の關係	.....	(八)
進化論と胎兒の發育	.....	(八)	胎教の價值	.....	(八)
胎教の本意	.....	(八)			
<b>第九章 妊婦に腹帶は必要なりや</b>	.....	(九)			
我國特有の五月帶	.....	(九)	害のない腹帶	.....	(九)
五月帶の目的	.....	(九)	腹帶の利益	.....	(九)
徳川時代の腹帶廢止論	.....	(九)	腹帶の必要なる場合	.....	(九)
人工は例外なり	.....	(九)			
<b>第十章 つばりの手當とその原因</b>	.....	(一〇)			
惡阻に二種ある	.....	(一〇)	惡阻の原因	.....	(一〇)
軽い惡阻の手當	.....	(一〇)	惡阻の手傳をする病氣	.....	(一〇)
性質の悪い惡阻	.....	(一〇)			
<b>第十一章 不妊症及びその治療法</b>	.....	(一一)			

不妊の責任は男女共通	(一三)	不妊症の治療法	(一三七)
男子に存する原因	(一三)	人工妊娠法	(一四〇)
婦人に特有なる原因	(一四)		
<b>第十二章 人工流早産術および避妊</b>			
産兒制限	(一三)	犯罪的の墮胎	(一三四)
妊娠中絶術	(一三)	避妊に就て	(一三六)
<b>第十三章 流産の原因とその應急手當</b>			
流産の多い時期	(一三)	暗に流産を教唆する買薬	(一三八)
流産は普通のお産より危険	(一三)	流産の主因と誘因	(一三九)
外傷に基く流産	(一三)	流産の應急手當	(一四〇)
機械的の力を以てする流産	(一三)		
<b>第十四章 妊娠中の出血</b>			
妊娠中の月經と流産	(一三)	胎盤の早期剝離	(一四三)
葡萄狀胎胎	(一三)	其他の出血	(一四五)
子宮外妊娠	(一四)		
<b>第十五章 双胎は左程稀でない</b>			
双胎の出来る理由	(一四)	双胎に起る故障	(一四六)

### 分娩篇

双胎娩出の順序	(一五〇)	双胎の診断	(一五三)
<b>第十六章 お産になるは何時頃か</b>			
お産の日取	(一五)	最終月經の不明のとき	(一五〇)
妊娠は最終月經の後に成立する	(一五)		
<b>第十七章 お産の近づいたのは何うして判るか</b>			
妊娠期陣痛	(一六)	胎動の減少	(一六五)
位置の變化	(一六)	下り物の増加	(一六六)
尿意頻繁	(一六)		
<b>第十八章 愈お産になつたのは何うして判るか</b>			
規則正しい陣痛	(一六七)	無陣痛でもわかる	(一六八)
<b>第十九章 何時産婆を呼んだらよいか</b>			
遠慮は無用	(一七〇)	産婆の来るまでの注意	(一七一)
<b>第二十章 お産のための入院</b>			
お産の介助者	(一七三)	萬全のために醫師を要す	(一七四)

産婆本位と醫師本位	(一七六)	産院に入院する時期	(一七六)
往診と入院	(一七七)	理想の産院	(一八二)
初産婦と經産婦	(一七八)		

**第二章 分娩の経過と産婦の注意**

前駆陣痛と分娩時の陣痛	(一八四)	お産に要する時間	(一九四)
開口期の陣痛	(一八五)	お産の多い時間	(一九七)
破水前後の注意	(一八七)	警戒を要する後産期	(一九七)
戦慄陣痛	(一八九)	一般の注意	(一九九)
無痛分娩	(一九〇)		

**第三章 産室の選び方及びその準備**

産室の廣さ	(二〇一)	産室の光線及び燈火	(二〇五)
産室の位置	(二〇二)	産婦の寝具	(二〇六)
産室の整頓	(二〇三)	産汚物の始末	(二〇六)
暖房設備	(二〇四)		

**第四章 お産に用意すべき品々**

安全な分娩用具	(二〇九)	分娩用蒲團の拵へ方	(二一〇)
お産に用意すべき品目	(二一〇)	綿、木綿、ガーゼ類	(二一六)

鹽は大きいほどよし	(二二八)	襦袢及び産衣	(二三三)
輕便な湯たんぽと股引	(二三〇)	分娩用具の動員計畫	(二三四)

**第五章 分娩中の出血**

不意に起る出血	(二三五)	出血の時の手當	(二三六)
後産期の出血	(二三六)		

**第六章 所謂難産**

難産は恐るゝに足らず	(二三八)	胎兒に原因する難産	(二三九)
陣痛微弱	(三三九)	早期破水	(三三九)
産道の抵抗	(三三三)		

**第七章 安産に似て非なるもの**

墜落産	(三四二)	會陰裂傷	(三四三)
-----	-------	------	-------

**産褥篇**

<b>第二十七章 産後の養生は如何にすべきか</b>	(三四六)	排尿及び便通	(三五〇)
産褥の一般注意	(三四六)	産後の食物	(三五一)
惡露	(三四七)	斷物には及ばず	(三五二)
熱、脈および褥汗	(三四九)		

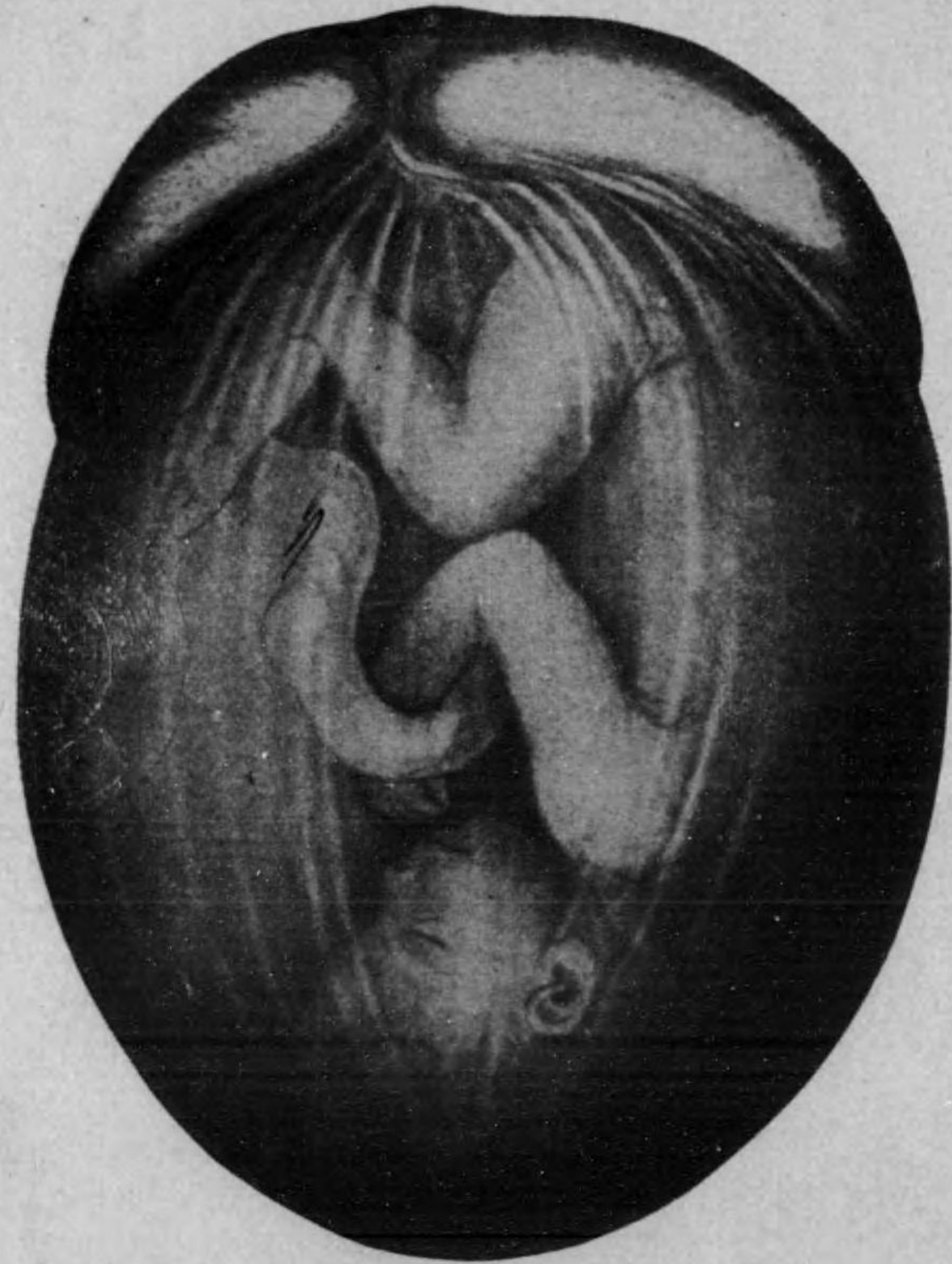
精神上の安寧	.....	(三五)	外出及び入浴	.....	(三五)
衣服並に褥室	.....	(三五)			
<b>第二十八章 乳腺と乳汁</b>	.....	(二五六)			
初乳とは何んなものか	.....	(二五七)	乳汁と月經	.....	(二五七)
乳を増す薬及び食物	.....	(二五九)	病菌の移行	.....	(二六三)
離乳の時期	.....	(二六〇)	薬品と乳汁	.....	(二六四)
乳汁の分量	.....	(二六一)			
<b>第二十九章 産褥熱</b>	.....	(二六六)			
産褥熱の病理	.....	(二六六)	消毒しても起る産褥熱	.....	(二七一)
産褥熱傳染の経路	.....	(二六八)	産褥熱の熱	.....	(二七三)
統計の示す消毒の効力	.....	(二六九)			

嬰兒篇

<b>第三十章 初生兒の生理</b>	.....	(二七六)	初生兒の體重	.....	(二八〇)
臍の緒と臍の手當	.....	(二七六)	初生兒が乳を分泌する	.....	(二八三)
初生兒の便と便秘の手當	.....	(二七八)	初生兒にも月經がある	.....	(二八四)
初生兒の尿	.....	(二八〇)			

初生兒黃疸	.....	(二八六)			
<b>第三十一章 初生兒の取扱ひ方</b>	.....	(二八九)			
初生兒沐浴の時間	.....	(二八九)	湯上りの取扱ひと爪の剪り方	.....	(二九四)
沐浴の室	.....	(二九〇)	初生兒の衣物	.....	(二九五)
沐浴の準備と湯の温度	.....	(二九一)	室内の温度	.....	(二九六)
沐浴の注意	.....	(二九五)			
<b>第三十二章 初生兒の營養</b>	.....	(二九八)			
初生兒最初の食物	.....	(二九八)	乳齒と食物の關係	.....	(三〇六)
乳の補助食餌	.....	(三〇〇)	哺乳開始の時期	.....	(三〇七)
人乳と牛乳の優劣	.....	(三〇四)	哺乳の回数と分量	.....	(三〇八)
<b>第三十三章 赤坊には斯うして授乳する</b>	.....	(三一一)			
授乳の姿勢	.....	(三一一)	授乳不能と不可の場合	.....	(三二五)
乳房の消毒	.....	(三一二)	授乳中の衛生	.....	(三二七)
十分に呑み干させること	.....	(三二四)			
<b>第三十四章 乳母を選ぶには</b>	.....	(三三一)			
乳母の選擇は困難なり	.....	(三三一)	乳母の年齢	.....	(三三四)
誰にも判る鑑別法	.....	(三三三)	先づその子を見よ	.....	(三三五)





兒胎の内膜卵  
(盤胎は上)

乳房と乳量	..... (三六)	乳母の食物及び生活状態	..... (三六)
理化学的検査の價値	..... (三七)		
<b>第三十五章 初生兒の人工營養</b>			
牛乳と山羊の乳	..... (三〇)	コンデンスドミルク	..... (三〇)
牛乳の薄め方	..... (三一)	煉乳の薄め方	..... (三一)
砂糖分の補足	..... (三四)	人乳と牛乳の混用	..... (三六)
<b>第三十六章 牛乳の消毒法</b>			
牛乳に混入せる有害物	..... (四〇)	牛乳屋の消毒	..... (四四)
昔の消毒と今の消毒	..... (四一)	危険なる魔法罐	..... (四五)
消毒罐の使用法	..... (四二)		
<b>第三十七章 早産兒の手當</b>			
早産兒の營養	..... (四七)	早産兒の保温と清潔	..... (四八)
<b>第三十八章 初生兒に時々見る異狀</b>			
産瘤と頭蓋血腫	..... (五一)	消化不良	..... (五一)
耳の病氣	..... (五二)	乳兒脚氣	..... (五二)
驚口瘡	..... (五四)	皮膚に起る故障	..... (五八)

胎兒  
(大物實)

三ヶ月



二ヶ月



一ヶ月



四ヶ月

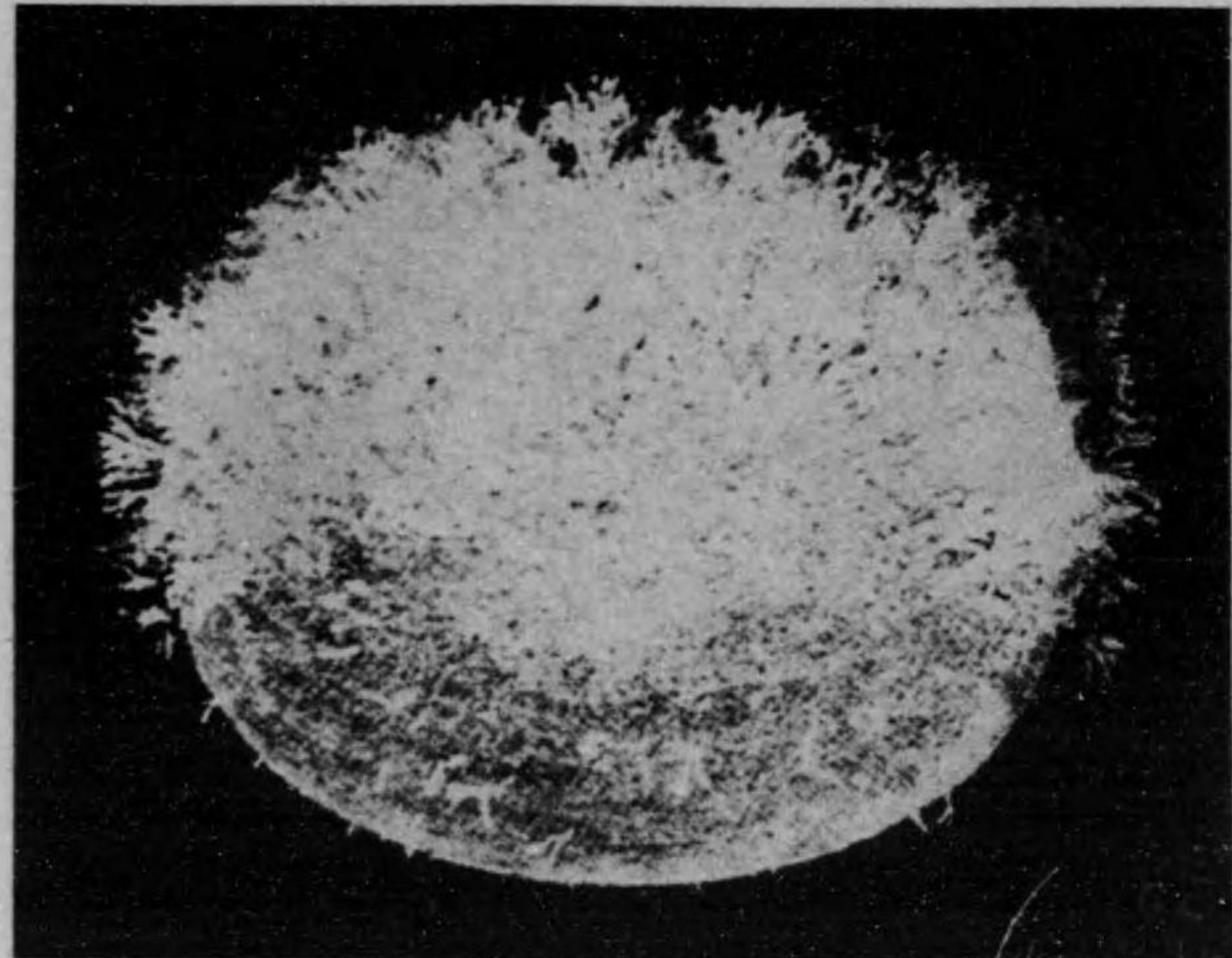




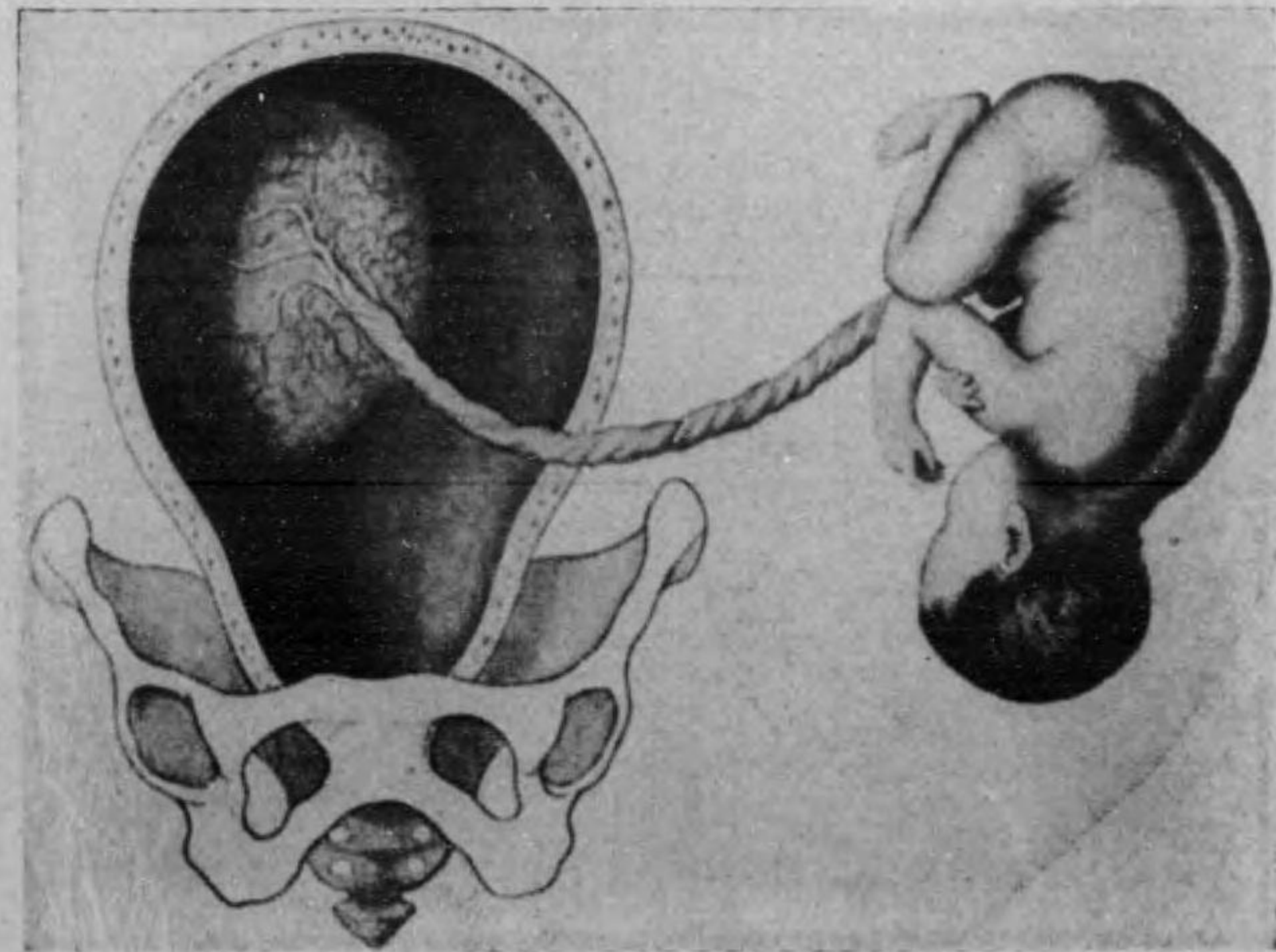
(婦人壽草)

月  
經  
篇

子<sub>レ</sub>卵<sub>ノ</sub>の 月<sub>ヲ</sub>ケ 三 胎<sub>ヲ</sub>受<sub>ル</sub>



係<sub>ハ</sub>關<sub>ノ</sub>の と 盤<sub>ヲ</sub>胎<sub>ニ</sub>び 及<sub>ビ</sub>帶<sub>ヲ</sub>臍<sub>ヲ</sub>と 兒<sub>ノ</sub>胎<sub>ヲ</sub>



# 第一章 月經とは何んなものか

## (一) 月經はいつから始まるか

婦人の一生を、少女期、成熟期および經歇期の三期に大別しますが、その少女期から、成熟期即ち生殖期に入る、初めの境界を破瓜期と云ひ、成熟期から經歇期に移る後の境目を更年期と稱へ、共に身體および精神上に、一大革命がおこります。就中破瓜期は、一に思春期、懷春期、または春機發動期などと云つて、それまでは内外生殖器をはじめ、全身すべてが子供らしい、幼稚の状態であつたものが、この時期に達すれば、子宮は勿論その他の生殖器に、著しい變化が起り、同時に全身殊に腰部、大腿部、その他關節部にも脂肪を増し、乳房にも變化をおこし、精神的にも亦た著しい變動を生じます。これ等のうちで、殊に目立つて

著しい變化は、即ち月經の初潮であります。

月經初潮の時期は、我國では平均十四歳八九月になつて居りますが、學者の調査によりて、多少の相違があります。尤もこれは氣候の溫和な國の初潮期で、獨逸なども略ぼ同様ですが、熱帯地方になるともつと早く初潮を見ますし、寒帯地方では一帶に遅れることとなります。また同じ國にしても、風俗習慣、周圍の境遇、身體の發育、體質の強弱などにより、遅速の相違がありますし、同じ東京にしても、山の手と下町とでは、既に多少の遅速ある傾きがあります。或は平生の食物にも關係があると云ふ人もあります。稀には十一二歳で初潮を見ることもありますが、身體その他の發育が良ければ、強ち異狀の出血とも限りません。然しそれより以下の年齢の少女に見る出血は、通常これを異狀と見ねばなりません。尤も初生兒には、偶に一種の月經に似た出血を見ることがありますが、それに就ては後に詳説する積りです。

(二) 月經はいつまで続くか

斯くして持続した月經の閉止する年齢は、通常四十六七歳で、俗に四十八の恥かき子と云つて、それ以後は月經もなく、妊娠もしないものとなつて居ります。つまり初潮以來月經の持続する期間は、三十年乃至三十五年のもので、この閉止する時期が、即ち前に述べた更年期であります。然しこれにも例外があつて、五十七歳になつても尙ほ月經を見、且つ妊娠する例があります。ケンネデー氏の報告によれば、六十二歳の老婆が産をして、普通ならば月經の消ゆべき、四十七歳より六十二歳までに、七回産をなし、その以前のと合すれば、二十二回産をしたとあります。先年これに似た新聞記事を見ましたが、それは大分縣宇佐郡の某地方で、七十二歳の老婆が産をしたとありました。これを事實とすれば正に世界のレコードを破るものですから、早速村役場に照會して見ますと、七十二歳

の老婆のあるのも事實だし、當時これが産をしたと云ふ噂の立つたのも事實であるが、實は産をしたのではないと云ふ返事がありました。兎に角五十歳以上の月經および妊娠は、世界を通じて例外となつて居ります。

(三) 月經の正しい経過は何んなものか

月經の出血期には長短があり、その出血量に多少がありますが、通常は三日乃至七日間続くものです。これが九日十日と続けば、最早病氣と見ねばなりません。尤も中間四五日目に一度やすんで、更に出血を見ると云ふ例もあります。

月經時の出血は、他の血と違ふかのやうに思はれ、昔から何か特別に汚れたものゝやうに取扱はれて居りましたが、これは大體は他の血液と違ふ譯のものではありません。只だ月經の出血は、外部に排出するまでに、途中で粘液を混じますから、普通の血液のやうに凝らないまでのことです。それで若し月經の場合に、

その出血が凝血となつて出るならば、それは出血が多過ぎるもので、それには相當の手當をせねばなりません。

月經を見はじめ後は、妊娠、産褥、哺乳、その他疾病なき限り、普通四週間（二十八日）毎に規則正しく見る筈ですが、偶々三四日前進したり、或は遅發したりすることは、有り勝ちのことです。但し初潮の時は往々不規則になり易く、一度初潮を見たのみで暫らく休み、半年一年を経つて後に、初めて規則正しく来る様になるのは珍らしくないことです。

(6)

(四) 通經時に有り勝ちの故障

特別の病氣でなくとも、月經時には神経系に幾分の影響があるもので、神経が過敏になつたり、頭痛を催したり、或は消化器などに多少の變動を及ぼしたりして、妻の精神状態を見て、月經の潮來を察する人さへある位です。その他乳房が

軽く痛んだり、または張つて見たり、或は下腹部が痛んだり、腰が痛む様なことは、通經時によく有り勝ちの故障です。然しそれが餘り度が強い場合には、一の異状と見ねばなりません。

年頃になつて月經がないとか、または中絶して久しく見ないのは、病氣に原因するものと否らざるものとあります。貧血又は結核等に基づく營養障害などのために、あるべきものが無いこともありますし、また時として生殖器の疾病のため無いこともあります。また破瓜期に入つても、處女膜に孔がなく、爲めに出血があつても、外部に排出されないこともあります。この場合には腔内または子宮腔内に、古い血が恰もコールドールのやうになつて溜り、種々の障害を起すことがあります。これ等は速かに専門醫の手術を要するもので、その婦人科的手術は割合に無難作に出来ます。

(7)

第二章 何んな風にして受胎するか

(一) 腹は借りものではない

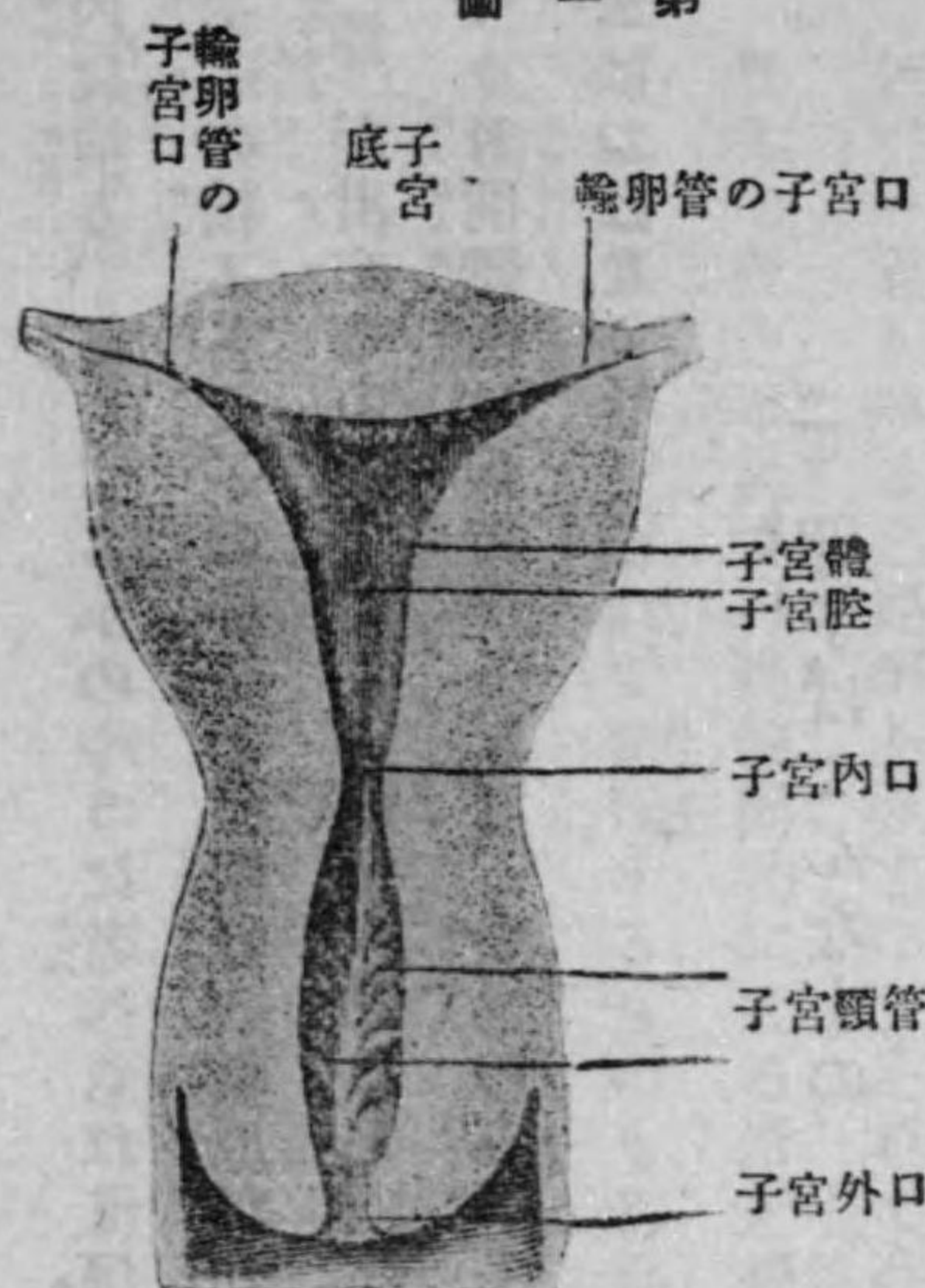
月經とは何んなものか、その性質を理解するには、先づ受胎して妊娠する模様を、一通り知る必要があります。それで生物の生殖作用を調べて見ますと、下等なものほど単純で、高等動物になるほど複雑になります。例へば單に細胞が括れて二つに分れ、それで繁殖するものもあれば、少し進んでデストマの一種、または蝸牛や條蟲などのやうに、一個體のうちに雌雄の兩性を具へて、子孫を作るものもあります。もつと發達したもの、殊に哺乳動物では、男女別個體の種原が相合して、こゝに初めて生殖作用が行はれるのであります。所が昔時の思想では「腹は借りもの」などと云つて、種原は男子の方からばかり來て、それが女子の體

内に宿り、發育するかのやうに考へられて居ましたが、これは大變な間違ひで、男子の精子と女子の卵子と、兩性の種原が女子の體内で融合して、初めて胎兒の源が出来るのです。この點から見ると、生殖の分擔は兩性平等であつて、寧ろ十ヶ月間體内に保持するだけ、女性の方が子孫に對し、深い關係を有つて居ると云はねばなりません。

(二) 卵子はこんなもの

胎兒の種原の一つとなる卵子は、女子の卵巢の中から出て來ますが、卵巢は子宮の左右に一対あつて、まだ最初の月經を見ない少女の時代には、その發育も不十分で、小さな棒の様に細長い形をなし、その中にはまだ幼稚の状態ではあるが到底一生涯に出盡せないほどの、夥しい卵子の種原がはいつて居ります。それが破瓜期に入り、生殖器の成熟する頃になると、次第に發育して、卵巢の形も大

第一圖



子宮左右方向断面

きさも桃の核のやうになり、その中の卵子も、一つ／＼順次に成熟して、注意すれば肉眼でも見られるくらゐの大きさとなります。そして未婚既婚の差別なく多くは月經と相關聯して、四週間に一度、一個づつ、卵巢の表面から弾き出されます。この周期的に弾き出された卵子が、生殖の機能を保つて居る間に、男子の精子と逢へば、それで直ちに受精しますが、工合よく精子と逢はなかつた時は、その儘無駄になつて棄てられるのであります。

の儘無駄になつて棄てられるのであります。

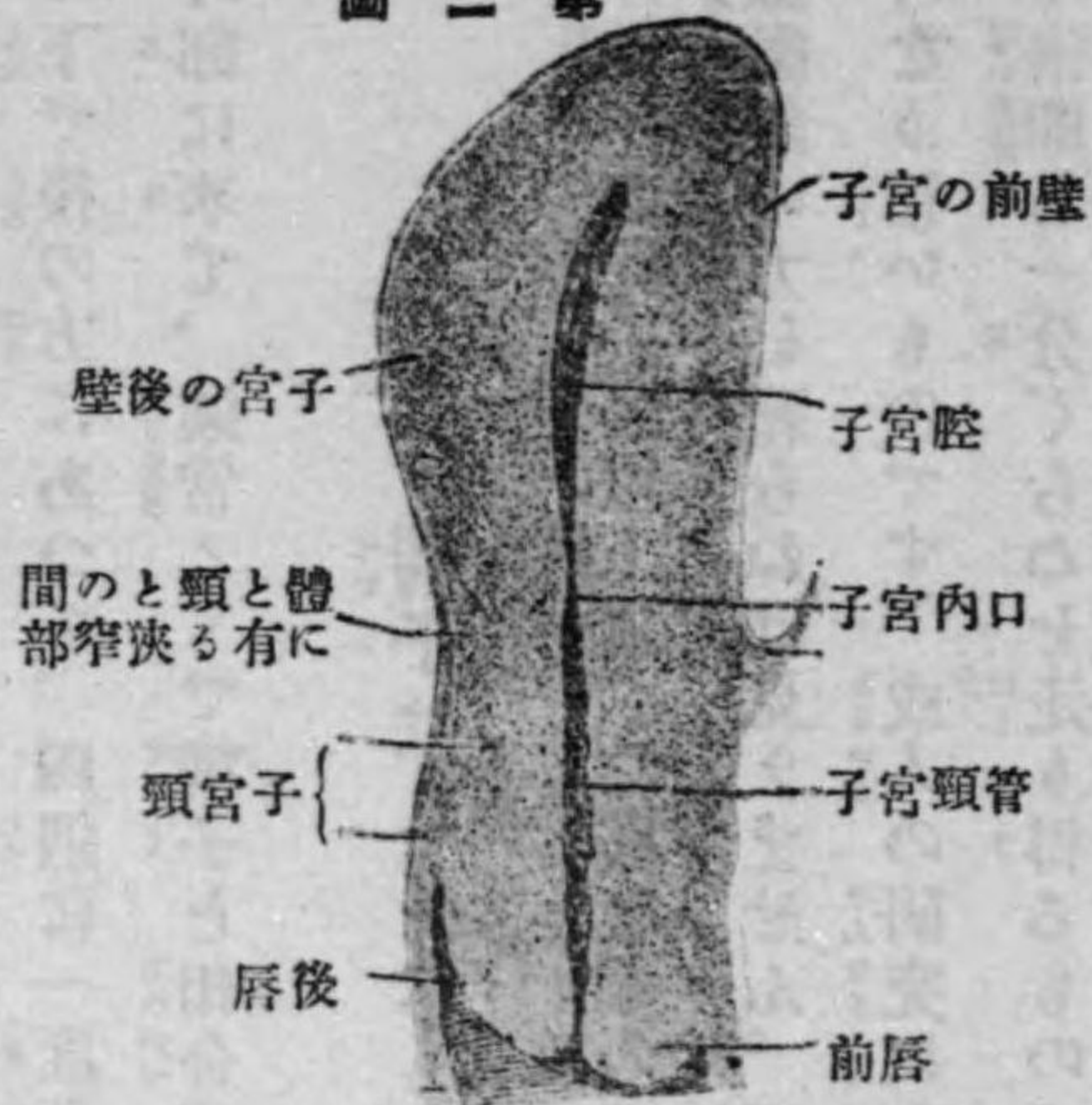
(10)

(三) 受胎の場所は

何所か

こゝで少し解剖に亘つて説明する必要が有ります。生殖器の

第二圖



子宮前後方向断面

子宮の中は子宮腔と云つて、恰も琵琶の撥のやうな形に左右に廣く前後に狭い、底を上にした三角形の空洞になつて居て、平常はあまり廣くはありません。この空洞の内面は粘膜を以て被はれて、その粘膜は子宮内膜と稱へられて居ります。子宮腔の上の方で、最も左右に擴がつた部分の終端、前述の撥に譬へて云へば

中心となるものは無論子宮で、それは腔の奥にあつて、その形は通常鶏卵大のもので、恰も茄子を前後に壓しつぶして稍扁平くし、蒂を除つて倒置にしたやうな形態をして居ります。この蒂の所を子宮頸部と云ひ、上の主要なる部分を子宮體と稱へその頂上の部分を子宮底と申します。

(11)



角にあたる所から、左右兩方向つて、輸卵管と稱する管が出て居ります。その長さは子宮の丈ぐらゐで、管の内部はやはり粘膜を以て被はれて居ります。この管の端は喇叭のやうに廣く開いて居る所から、また喇叭管とも云ひ、その開いた部分を漏斗部と稱し、そこには澤山の襞があります。前項に述べた卵巢は喇叭管の下で後の方にあつて、四週に一度卵巢の表面から弾き出された卵子は、この漏斗部に來て、通常こゝで精子と相合するものと見做されて居ります。

(四) 精子はこんなもの

女子の卵子は以上述べた様なものですが、男子の精子の方は更に微細なもので顕微鏡の力を藉らねば見えません。而もその運動は頗る活潑なもので、生活力も可なり強いものです。或人の研究によると、適當な所では一分間にその身長のお十倍即ち一分ぐらゐを走り得るもので、一秒時間に自分の身長だけを泳ぐことが

出來ます。但しこれは何も障害のない時の活動力のこと、實際は一時に腔内にはいつた無数の精子が、子宮腔内を経て喇叭管内に達するまでには、途中いろいろの障害があつて、無事に到達し得る精子の数は、甚だ少數に過ぎません。殊に喇叭管の内面には纖毛があつて、それが秋風にそよぐ草の如く、絶えず子宮の方に向つて運動して居りますから、折角こゝまで來た精子も、この纖毛運動のため、後へくとおし戻されて、これを通り抜けるためには、正に逆流を溯らねばなりません。それでも活動力の旺んな一部の精子は、よくこの難關を突破して、漏斗部の襞の中に潜み、そこで卵子の出で來るのを待つのであります。何のくらの間に待つて居るかは、確かに分りませんが、割合に長い間生存して居るらしく、或る動物の精子は冬を越して、翌年まで生存することを確かめられて居ります。人間の精子については、或る婦人の手術にあたり、喇叭管を調べて見た所が、約四週間前にはいつた精子が、尙ほ機能を有つて生存して居たことを

偶然発見されました、少くとも四週間はこゝに潜伏して、生存し得ることが確かめられました。

(五) 斯くして受胎する

然し卵子の生活力に就ては、未だ人體では研究されませんが、割合に短かいものらしく、卵巢から排出されて後受胎の機能を有つて居るのは、恐らく五日間くらゐだらうと推定されて居ります。この推定が假りに間違ひなしとすれば、排卵して五日間内に精子と逢はなければ、その卵子は無効となる譯ですが、然し實際は排卵以前にはいつた多數の精子が、喇叭管の壁に待ち伏せして居りますし、而も前に述べた通り、精子は四週間も生活し得るものですから、卵子の生活中に精子と逢ふことは、左ほど困難でもありません。若しこの卵子が精子と逢へば、忽ち一つに融合してこゝに胎兒形成の初めを成します。これを受胎作用と云ひま

す。この場合には、最初に觸れた精子とのみ融合するが通常で、一度受胎すれば、最早その後の精子は拒まれることになりす。

卵子が精子と相會して融合する時には、内部に種々複雑なる變化が起り、管に精子と抱合したに止まらず、その實質が全く融け合ふのであります。譬へば白い飴と赤い飴とを、合せては伸ばし合せては伸ばしするうちに、徹頭徹尾混合して、何の部分を切つて見ても桃色の飴となつて居るやうに、卵子と精子と二つのものが、一つのものとなつてしまふのであります。而して一度融合して、平等に十分融け合つた時には、その一團が二つに分れ、次にはそれが各々また二つに分れて四つになり、次で八つ十六と追次倍加し、細胞數がだん／＼多くなつて發育します。勿論その各個の細胞の何れも、精子と卵子との兩成分から成り立つて居るのであります。

(六) これて愈々妊娠

精子と卵子と融合した細胞が、だん／＼殖へて形體が大きくなりつゝ、輸卵管を通つて子宮に移つて行きます。この時には前に精子の溯るのを妨げた、輸卵管内の纖毛の運動は、却つて受精卵の子宮に移るのを助けますし、また子宮に近い輸卵管の狭い所になると、管の蠕動運動がこれを助けて、結局子宮腔内に送り出し、子宮内膜、殊に其上部に来てそこに附着します。この時を以て妊娠の初めと致します。尤も受精の時を以て妊娠の初めとする人もありますが、受精して妊娠するまでに、中間の時期があります。受精しただけでは、妊娠は未だ未必の状態にありますから、受精卵の子宮内膜に附着する時を以て、妊娠の初めとするが至當のことです。

右は受精より妊娠までの普通の順序ですが、若し輸卵管が腫れて居たり、折れ

曲つて居たりすると、受精卵が途中につかへて通過することが出来ず、而も受精卵は容赦なく發育して輸卵管内の粘膜に附着し、こゝで妊娠することがあります。これを喇叭管妊娠と云つて、子宮外妊娠中の主なるものであります。またこれ等の故障もなく、無事に子宮腔内に來たとしても、その時に子宮内膜の状態が不適當であれば、これに附着することも出来ず、また受精卵を養ふことも出来ませんから、遂に妊娠となり得ず、その儘體外に排泄されてしまひます。それでこの受精卵が無効とならずに、妊娠するためには、子宮にそれ相當の準備がなければなりません。その準備のために子宮内膜は、四週毎に一定の變化を行ふて居ります。この巧妙なる内膜の周期的變化は、次の章に説明いたしませう。

第三章 月經は何故來るか

(一) 月經と妊娠との關係

喇叭管で受胎した卵子が、子宮腔内に來ても、それが妊娠となるためには、何時でもよいと云ふ譯ではなく、受胎卵が附着するに都合のよいやうに、子宮内膜が相當の準備をして居た時でなければなりません。その準備と云ふのは即ち子宮内膜の充血と腫脹とであります。

一體子宮内膜は、何時も同じ有様ではなく、月經の始まつた第一日から、次の月經の來潮するまでの、約四週間(二十八日)を一周期として、斷えず變化を繰返して居ります。この變化の模様を、便宜上四期に區別して見ますと、二十八日のうちで、前後の十日間づつを除いた、中央の約八日間が、子宮内膜として最も

尋常の有様で、云はゞ特別の變化なくして、休息して居る時期ですから、この間を休息期または間歇期と云ひます。この時には内膜の厚さは、曲尺の一分に足らぬくらいのものでありますが、だん／＼終りに近づくにつれて厚くなり、終りの約十日間に入ると、内膜の細胞が増加し且つ肥大して、内膜内に血液が充滿し、その結果内膜が腫脹して、二分以上の厚さになります。この状態は次の月經の先驅に相當しますから、これを月經前腫脹期と稱へて居ります。この時期は受胎卵が内膜に附着するに、最も都合のよい時期で、通常この時期のはいりかけ、またはその少し前に排卵し、それが受胎して輸卵管を通り、子宮内に來て厚い内膜の上に乗ると、その周囲を厚い内膜で取圍んでこれを養ひ、妊娠はこゝに成立つのであります。尤も廣い意味で云へば、卵子が精子に會つて受胎した時に、既に妊娠の端緒を開いた譯ですが、受胎した卵子が子宮に來るまでには多少の時日があつて、前に述べたやうにその途中に滯つて子宮外妊娠となつたり、または子宮を

素通りすることもありますが、眞の妊娠はこの受精卵が子宮内膜に附着して、初めて成立つものと見ねばなりません。

何時受胎して何時妊娠したかは、到底人力を以て知ることは出来ませんが、右の理由により、最終月經の第一日より二十八日以内、殊に終りの十日間に、妊娠が成立つたものと見ることが出来ます。これによつて見ると、古來早くて二百四十日、遅くて三百二十日、平均二百八十日とした妊娠期間は、最終月經の第一日を妊娠の第一日と假定して、未だ妊娠の成立つて居ない日數をも加へたもので、本當の妊娠期間は、それよりも短かい譯になります。その證據は凌辱の場合とか、海員が偶に航海より歸つて來て、翌日直にまた出立したとか、すべてその妊娠に關係のあるべき受胎の機會が、只だ一回よりなかつた場合に、それ以後一回も月經の潮來を見ずして妊娠が成立し、その機會以前に見た最終月經より起算して、丁度二百八十日くらゐで分娩した例が少くありません。それで兩性相會した

日から勘定すれば、分娩までの日數は二百八十日より短かいのが當然で、平均は二百七十日乃至二百七十六日になつて居ります、而もこの受胎の機會は、眞實の妊娠より幾日か以前であつて、正味の妊娠期間は、更に短かいものと見ねばなりません。

(二) 月經がなくとも妊娠し得る

前に老婆がお産をした話をいたしました、子供の産は割合に珍らしいことではなく、某々尋常小學校の生徒が妊娠して早産したと云ふやうな新聞記事を、時に見受けることがあります。印度では宗教の關係から、早婚の風があつて、十歳内外で分娩すると云ふことです。ドウトレボン氏の報告中には、八歳で妊娠して、九歳でお産をした例を挙げ、先年支那人薛某氏の所では、八歳の孤兒が分娩したことを新聞で見ました。これには可愛らしい兩親の間に擁せられて居る、嬰

兒の寫眞までも載せてありました。これ等はまだ月經の初潮を見ずして妊娠した  
ものらしく、月經の初潮以前に排卵はあつたものと見ねばなりません。

また相當の年齢に達し、一回も月經を見ずして産をした例もありますし、三  
十二歳まで月經を見ず、三十二歳で初めて妊娠したと云ふ例もあります。また一  
回も月經を見ずして、八人も子を産んだ例もあります。これ等の實例から推して  
考ふれば、月經時の出血と妊娠とは、必ずしも一致するを必要としないことが分  
ります。實例として斯様なのがあります。或る年の十一月二日より平常の如く月  
經を見て、十一月二十日に結婚しましたが、直ちに受胎したと見へて十二月には  
最早月經を見なくなりました。その後私は診察の結果妊娠と認め、分娩豫定日  
は略算法により、翌年八月九日としましたが、最終月經の第一日より正しく二百  
八十日目なる八月七日に、成熟した男児を安産しました。この例などは結婚した  
日から數へると二百六十二日目に分娩したことになりましたから、素人考へには甚

だ不都合なやうに感ぜられますが、前に述べた理由により少しも不合理ではあり  
ません。これで見ても妊娠には、月經出血が必要でないと云ふことが分ります。

(三) 妊娠中にも月經がある

以上述べた様に妊娠すれば最早月經を見ぬ筈のもですが、時として夫が長い  
旅行にでも出立した後、一度月經を見ながら妊娠して、その節操を疑はれるや  
うな、實際問題が起ることがあります。然しその冤罪を雪ぐには、二つの解釋が  
あります。前に述べた通り、精子は四週間も機能を有つて生存するほど、生活力  
の強いものですから、最終月經以前にはいつたものが、その儘何所かに潜伏し  
て、月經後まで生活力を有ち、次の排卵の時に受胎したものと見るのがその一で  
す。第二は最終月經と見たのは、眞の月經ではなく、妊娠中の出血と見做さねば  
ならぬ場合もあります。

妊娠中の月經は、我國の婦人の間にも比較的多く見る事實で、曾て診た妊婦は、五人も子を産んだ經産婦ですが、妊娠の度毎に初めの三四ヶ月間は、必ずさちやうめに月經を見ると云ふので、分娩豫定日も最終月經から計算する譯に行かず、他の徴候で定めなければならぬと云ふのがありました。斯う云ふ例は、産婆の集會などで割合に多く聞く所で、殊に最初の一ヶ月に月經を見るのは、左程珍らしくないことです。歐洲では千九百九年の報告に、一家族のうちで四人まで系統的に、妊娠後六ヶ月間月經を見たこと云ふ事實があります。またアリストートルその他古來の有名な學者も皆なこれを認め、チルト氏は百人の妊婦中八人まで、妊娠中の月經を見たこと報告して居ります。極端な例になると、南洋のニューギニア、フキジ、諸島の或る種族には、妊婦は悉く月經を見るのが、原則のやうになつて居るのがあるさうで、或る學者の報告では、月經を見たことさへない婦人が、妊娠してから初めて妊娠中に月經を見るやうになつたものさへありま

す。斯う云ふ點から見ても、兩性相會して後に、一度月經を見て妊娠した場合でも、必ずしもその節操を疑ふことは出来ません。

(四) 妊娠後第一の變化

受精卵が月經前腫脹期の子宮内膜に附着すると、こゝに妊娠が成立つて、二分以上の厚さに腫脹して居た内膜は、ますます厚くなつて三分以上になります。この膜は分娩の際脱落すると云ふ意味から、脱落膜と稱へられます。この脱落膜のうちで、受精卵の附着した部分は、殊に著しく厚くなり、同時に卵子の方では、絨毛と云つて外面一ぱい生へて居た、木の根のやうなものが、この内膜に附着した面だけ、著しく成長増加して、特に厚くなつた脱落膜の中に深く根を下ろし、恰も植木鉢の木の根が、土の中に蔓るやうな風になります。即ち子宮壁と云ふ植木鉢の中で、脱落膜と云ふ土が出来て、その中に絨毛と云ふ根が一ぱい蔓る譯で

す。この絨毛の蔓つた脱落膜の部分が即ち胎盤で、分娩の時には經六七寸の中皿大の、饅頭のやうな扁平圓形をしたものになります。

この胎盤には、母體の血液が来て充實すると同時に、卵子から根を下した絨毛内には、胎兒の血液が来て、母體の血液からその營養分を吸ひ上げます。但し絨毛の表面は、薄いながらも膜で掩はれて居りますから、母體の血液そのものを、その儘吸ひ上げるのではなく、血液は母子各々別々の經濟で、只だ母體の血液から、水及び水に溶けた營養分と、酸素だけを吸ふのです。即ち母體血液中の營養分及び酸素は、絨毛の膜を通じて胎兒の血液に入り、胎兒の血液中の老廢分及び炭酸瓦斯は、同じく絨毛膜を通じて母の血液に戻る譯です。この絨毛中の血管は諸方から合して一本となり、臍帶の中を通じて胎兒に入り、胎兒を循環して廢物となつた古い血液は、再び合して二本の管となり、同じく臍帶を通じて細かに絨毛に分れ、母體に廢物を返して、新しい營養と交換するのであります。胎盤は

斯の如く胎兒の營養の源で、胎兒が羊水を食ふと云ふ説もありますが、然しそれはほんの僅かなもので、消化器は殆ど働かないと云つて差支なく、肺も働かず、血液中の老廢物も腎臟より出るのでなく、胎盤から出すのでありますから、この胎盤は消化器、呼吸器及び泌尿器の作用をなす大事なものであります。それゆゑ妊娠中轉んだり腹部を壓迫したりして、胎盤が剝がれることがあれば、胎兒は生命の綱を斷たれる譯で、母體の腎臟炎等のために剝れても、同じ結果になるのであります。分娩の際にも、若し過つて娩出前に剝がれることがあれば、出血を起して母體を危くし、同時に産兒にも危険を及ぼしますから、産兒が産れて自ら呼吸を營むに至るまでは、胎盤は決して剝がれてはなりません。此の胎盤は分娩後二三十分で自然に剝がれ、子宮の壓力によりて、普通は自然に出る筈のもので

す。(第八章第六節参照)



(五) 何故月經時に出血するか

月經直前に腫脹して居る内膜に、受精卵が附着すれば、右に述べた通り脱落膜となり胎盤と變じますが、若しその時に受精卵が附着せずに素通りするとか、或は卵子が來ても、受胎しない卵子が來れば、内膜は最早これを養ふ必要がありませんから、それ以上厚くなる必要なく、折角待設けて充血腫脹して居た内膜は、恰もお客を待つた宿屋が、泊りがないために御馳走を仕舞ふやうに、今はこれを取片付ける必要が起つて來ます。こゝに於てか充血して居た血液は子宮腔内に滲み出して、子宮口から腔を経て體外に排出されます。これ即ち婦人が月經として見る所の出血であります。この血液の排出する間を月經期と云ひ、人によりて長短がありますが、通常三日乃至七日間持續するものです。

木をする時に木の皮に傷をつけるやうに、受精卵が内膜に附着しやすいために、新しい傷を必要とする、月經はその傷から出血するのだと説いたものです。然し事實は月經の時に、特に大きな傷が出来るものではなく、充血が滲み出るに過ぎないのであります。また月經を几帳面に見る婦人は、受精卵を待設けつゝある時期にあると云ふ意味にはなりません、然し月經出血その物が妊娠に必要なものではなく、偶々前の生産の後、一度も月經を見ずして妊娠するのは、月經そのものが妊娠に必要なことを證據だてます。

月經第一日から約十日間のうちで、月經出血期を引いた残りの數日は、内膜が普通の状態に恢復する時期ですから、これを再生期または月經後期と云ひます。即ち月經を起點として云へば、第一は月經期即ち月經出血期、第二は月經後期即ち再生期、第三は前に述べた休息期即ち間歇期、第四は月經前腫脹期と云ふ様な順序に内膜が變化し、これが一順終ると次の月經が來潮して、妊娠せざる限り約

四週間に一順づつ繰返されるのです。但し、人によりて多少の長短があつて、例へば、三十日を周期とすることもあり、または二十五六日に一循環する人もあります。

#### 第四章 月經中の養生法

##### (一) 精神上的の休養

月經初潮の時は勿論、すべて月經の潮來するときは、精神および肉體に種々の影響がありますから、この際特に精神の安静、肉體の休養、および清潔の、三ヶ條に注意せねばなりません。

月經時の影響は、人によつて様相が違ひますが、普通精神的にも多少の影響があつて、一般に思慮分別が薄くなり、感情も激し易く、意思も薄弱となりませす。それで僅かなことに怒つて見たり、沈鬱になつたり、焦燥いだり、所謂ヒステリイ的の傾向を帯びて來ることがあります。殊に平生頭を使ふ人は、概して精神的影響を受けやすい傾きがあつて、考へ事をしてても良い結果を得ず、従つて疲勞

を感ずることも早くなります。そこで通經中の養生の第一として、努めて精神を休めることに注意し、出来得べくんば家事の心配にも遠ざかり、娛樂なども控へ目にし、殊に感情を激發せしめるやうな、芝居とか小説などは避ける必要があります。

(二) 肉體的の養生

月經時には子宮卵巣その他子宮附近に充血して、過度の運動をすれば出血を多くし、自然婦人科的病氣を招く恐れがあります。然し全然仕事を休むと云ふことは、實際上實行されないのみならず、それほどまでの必要もありませんから、平生慣れた労働や運動ならば、少し位はしても差支なく、只平日よりも控へ目にする必要があります。西洋では騎馬自轉車舞踏等を禁じますが、これに類することは無論差控ゆべきことで、長途の旅行特に徒歩の旅行は見合せねばなりません。

尚ほ一つ注意すべきは、月經中感冒にかゝらないやうにすることです。平生でも下を冷すことは甚だ悪いことで、恰も咽喉や鼻の粘膜が冒されて加答兒を起すやうに、寒冷のために生殖器に炎症を起し、それが慢性に變じて婦人科病を起すことがあります。諸種の婦人科的病氣は、腰部を冷したため、殊に月經時に冷したために起り易いものですから、湯上りなどに特に注意し、寒冷の時にはネルのやうなもので腰部を巻くとか、特に注意する必要があります。

(三) 月經時の手當

月經時には生殖器一般に充血して居り、子宮の内部に微細ながら無數の疵が出て、且つ内部に血液が附着して居りますから、勢ひ細菌が侵入し易く、又は繁殖蔓延し易い状態になつて居ります。この際特に清潔を必要とするのはこの理由によるもので、肌 directly するものなどは、つとめて清潔なものを用ひ、別して出

血のために用ゆる材料を、清潔にしなければなりません。殊に不潔な紙類を内部に用ひるなどは、わざ／＼細菌を疵に接近させ、同時にその繁殖を容易ならしめる結果となり、此上もない危険なことであります。總て紙でも綿でも、純白のもの必ずしも清潔とは限りませんし、縦令清潔にしても夫を内部に永く留めるのは宜しくないことで、時にその一部が過つて残留し、それが腐敗して軽くて膿炎、子宮内膜炎、重ければ喇叭管炎、卵巣炎、その他いろいろの婦人科病を起すこともあります。また材料その物は清潔でも、之を取扱ふ手に細菌があれば、矢張り不潔なものになりますから、これ等の材料を扱ふには、手をよく洗つてからすることです。殊に他の所に膿の出る疵でもある場合は、決し手の消毒を等閑にしてはいけません。

月經が普通の分量ならば、清潔な脱脂綿を外部に挟むだけで十分ですが、若しそれが特別に多い場合には、それに應じて綿を多く用ひ、防水材料で掩ふた上

に、丁字帯をかける必要がありません。近來この目的のため種々の月經帯を賣つて居りますから、その中で清潔な材料を使い、外に滲出ない装置があつて、同時に適宜に押へつける工夫をなし、腰に固定して取外しの自由なのを選んだなら、相當のものが得られませう。

(四) 月經中沐浴の可否

昔から一般に月經中は沐浴を禁じて來ましたが、これは月經中の養生と云ふよりも、月經を不淨と見て、寧ろ他人を憚かつて禁じたものでせう。今日の學理では月經は普通の出血で、敢て不淨汚れとは見ませんが、然し多くの人は矢張これを禁じて居ります。尤も入浴しても格別深く内部に湯のはいる譯ではなく、或人の調べによると、處女にあつては殆んど内部に入らず、經産婦にあつては幾分か入ると云ふ位です。單に浴湯中の不潔物を恐れるだけならば、之を禁ずる程のこと

はありませぬ。殊に新湯などは殆んどその心配がありませんが、然し入浴すれば充血を促して、之を強からしめる恐れがありますし、或は又反對に湯冷めのため、障害を起す恐れもありますから、さう云ふ意味から注意を要するのです。幸ひ昔から入浴しない習慣がありますから、その習慣に従ふのも良いですが、その代り月經が済めば早く入浴して、清潔にする必要がありません。

若し月經中入浴をしないならば、清潔を保つ必要上、時々殺菌した微温湯又は硼酸水等で、外部を洗ふのは良いことです。但し灌水器を用ひて内部を洗ふのは、平生洗つて居る人でもやめなければなりません。膈内へ入れる薬も、醫師の特別の指圖なき限り用ひぬ方が安全です。

(五) 月經中の食物と服薬

食物は平生と同じものを食べて差支ありませんが、たゞ多少消化器も影響を受

けて居りますから、不消化物を避ける必要があります。殊に薬味類または強い酒を多く用ひてはいけません。授乳は多少乳兒に影響しないこともありますが、そのために授乳を中止するほどの必要はありません。唯だ子供の状態に注意する位でよいでせう。

最後に月經の量が多いとか少ないとかのため、濫りに買薬を服んではいけません。賣薬も或る社會に必要なものもありますが、月經に關する薬を、素人考へて服用することは、絶対に宜しくないと云つてもよい位です。もと／＼月經の多い少ないと云ふことは、何れ原因があることで、その原因を究めて治療せねばならぬものを、すべてを薬をもつて調節しやうとするのは、もと／＼無理なことです。殊に無暗に通經劑を飲んで流産したり、または重い婦人病になつたり、或はまた生命に關することも珍らしからぬことです。この種の薬を濫用するは危険なことです。所謂通經劑と稱する賣薬でも、流産を起すほどの分量のものは、

許可されて居ない筈ですが、それを規定外に多量に服めば、時に奏効することもあり、その代り同時に恐るべき中毒を起し、取返しのかねことになり得ます。またこれと反対に月經過多のため、これを止める目的で、原因に構ひなしに薬を服めば、益々その原因たる病勢を強め、遂に治療の出来ないことになることもあり得ます。かたぐ月經に關する薬は、濫りに素人の用ふべきものでないと心得ねばなりません。

以上月經時の處置など、一般の婦人の注意すべき所ですが、殊に破瓜期に於て月經の初潮に驚き、誤つた處置をすることは、實際常に有り勝ちのことです。から、この期に達する前に、母親から一通りのことを豫告する必要がありませう。これを経験のない學友間の問題に委せておくのは、極めて危険なことで、また不親切なこと、云はねばなりません。

### 第五章 月經の異状とその心得

#### (一) 早期月經

前にも述べましたやうに、日本の女としては平均十四歳八ヶ月、早くとも十二歳以上に達して、初めて月經の潮來を見るのが普通ですが、その以前に起る月經を早期月經と稱へ、異状月經の一つに數へます。通常それと同時に肉體も早熟して、内外生殖器はもとより、乳房も相當に發育し、骨盤等も大人のやうになります。加之、生殖慾もふこり、生殖機能も備はり、従つて妊娠の經過も取り得るもので、稀に入歳の少女が妊娠したと云つて、新聞の種になるのは即ちこの種のもので、然し肉體的には早熟しても、精神上の主要なる發育は多くこれに伴はず、身體だけは大人で、精神は子供で居ると云ふのですから、往々節度を失つて

不良少女となり、延いては他の少女を不良少女に誘ふ恐れもあり、旁々教育上餘ほど注意と監督をせねばなりません。これ等は遺傳、環境、その他の關係から來ることもあり、また時に腦の松果腺等の疾病のため、生殖機能の早熟の結果を來すこともありまますから、醫學上からも注意を要するものです。

初生兒にも出血を見ることがありますが、それが早期月經であるか何うか、俄かに斷ずることは出來ません。尤も初生兒の乳腺が發育して乳汁が出るのと同じく、月經と同じ意味の出血もありませうが、然し窒息して生れた子が、體內所々に出血があるやうに、子宮や膈などにも出血があつて、それが出ることもありませう。また傳染性疾患或ひは外傷等のために、出血することも想像されますし、旁々何れの場合も月經とは云はれません。また少女時代になつて、卵巢の腫瘍などのため、出血することもあります。これも早期月經とは性質が違ふのは無論です。これ等の區別は専門醫でなければ分りませんから、成熟期以前に出血を見た

場合には、それが病氣か月經かを診て貰ひ、病氣の時はそれ／＼治療を加へることにせねばなりません。

(二) 月經と婦人科病

婦人科病には花柳病性のものが多いとか、或は夫の不品行に基づく病氣が多いと云はれて居ります。これ等は勿論多に相違ありませんが、然し私共の臨床的に經驗する所によれば、今日では一時世間でやかましく云つた時ほど、花柳病性のものは多くないやうに思はれます。曾ては苟くも内膜炎と云へば、必ず花柳病から來るものと思はれた時代もあつて、或る品行方正な夫が、その細君が内膜炎だと聞いて、妻の貞操に疑を挟み、密かに原因を聞きに來た人もありましたが、實際は必ずしも全部花柳病に原因するとは限らず、月經時の不養生のためにも往々起るもので、注意して見ると、結核性のものさへ時々發見することがあ

ります。その他月經時に於て、強がちな清潔な品を用ひずとも、俗に冷えると云つて過度に冷えたため、溫度的の刺戟によつて、炎症を誘發し得ることは前に述べた通りであります。

また月經時の處置が悪いために、婦人科病を起すのでなく、婦人科病のために月經そのものに變化を來し、内膜炎とか子宮が腫れたとか、或は子宮の位置が悪いつとか、腫瘍が出來たため、若くはまた卵巢喇叭管等の異狀に原因して、往々月經の量に多少を來したり、または時期に狂ひを生じたり、或は月經の頃に強い腹痛腰痛などを伴ふことがあります。

(三) 無 月 經

少女期と經閉期に月經のないのは云ふまでもないことで、その間の成熟期(生殖期)にも、妊娠、分娩、産褥および哺乳中には、生理上當然月經を見ない筈の

ものです。病的に月經の無いのは、生殖器の異狀によるものと、全身に關係あるものとありまして、生殖器に原因するものは、子宮、卵巢等の發育が悪いか、またはそれ等に病氣があるために起り、殊に小兒子宮とて、子宮が少女時代その儘の狀態のもの、または形は整つて居ても、過小のものなどは月經が無く、あつても少いものです。全身的の缺陷、例へば營養不良、血液不足等のためにも、月經を見ないことがあります。或はあつても量が少いとか、日數が短かいとか、若くは年に一二回と云ふが如く稀に見ることもあります。これ等を過少月經及び稀有症と云ひます。結核糖尿病などの消耗性疾患、または子宮以外の癌腫とか、慢性の中等等も、無月經の原因となることがあります。重病に罹つた後の恢復期にも、一時無月經となり、肥胖症または精神病者にも無いことがあります。産後餘り長く授乳すれば、子宮が萎縮して、その結果月經を見なくなることもあります。精神状態はよく月經に影響し、過度に精神を勞したり、心配事があつた爲めに



止まることがあります。また急激なる精神の亢奮感激のため、一時見なくなることもあり、月經中に精神に激動を及ぼし、その儘閉止することもあります。彼の妊娠と誤信して、妊娠と同じ状態になる想像妊娠の場合に、月經の閉止するのは、その著しい例で、精神的激動のため急に閉止し、その後不規則になることも往々實驗するものであります。これ等精神的原因に基く無月經症は、精神を過勞する若い婦人に多く見る所で、生活状態の急變も、一時的の無月經となることがあります。これ等は一種の精神的影響と見られませう。

(四) 代償月經

無月經より起る障害は、その原因によつて種々ですが、貧血等に原因する時は、心悸亢進全身倦怠頭痛等を誘發します。また月經が無いか若くは過少月經の時には、代償月經と云つて周期的に衄血が出たり、耳から出血したり、胃から吐

血したり、腸から下血したり、時には肺から咯血することもあります。これ等の症状は、卵巢を剔出した場合などによく起るもので、多く月經のあるべき時期に、周期的に起つて來ます。

(五) 有つて見ない月經

月經はありながら、通路の閉塞したために見ないことがあります。これは處女膜子宮口等が、先天的または病氣で閉鎖されて、經水の出口を失つた場合に起るもので、これを鎖陰と稱へて居ります。此の場合には月經はありながら、それが出ないので、月經時になると苦痛を訴へ、初めは軽い痛みに過ぎませんが、月を重ねるに従つて痛みも強く、初めは局所だけが周期的に痛んだものが、だん／＼腰や下腹部に及び、且つ平常も痛むやうになり、後には局所の塊が腹部から觸れるやうに大きくなります。これをその儘放任すれば、さん／＼苦しんだ

上に化膿して、終に大事に至ることもありすから、年頃の女で月經を見ず、且つ周期的に毎月痛む場合には、先づこれに疑を起し、婦人科醫に診て貰ふ必要があります。その治療は原因たる局所の如何により難易がありますが、處女膜の閉鎖だけならば、前に述べた通り至極手軽に手術が出来ます。

(六) 無月經の手當

無月經または過少月經、若くは稀有症の治療手當は、無論その原因のある所に向つて加へねばなりません。大抵直接間接に貧血または營養不良から來ることが多いから、全身の營養をはかることが肝腎です。營養と云つても牛乳スーヅ等、平常嗜まざるものを強ひて食べる必要はなく、甘藷でも南瓜でも何でもよし、消化の出来るだけ十分食べて、氣候のよい空氣のよい所に住んで適當に運動することが、營養を盛んにする要旨です。運動のためには一寸した登山もよし、

海邊に行くもよし、何れも疲勞を感じざる程度に止め、夜は十分眠るやうに努めねばなりません。若しまた貧血に原因するならば補血劑を用ひ、便秘のものは便通をよくし、鹽湯またはひば湯などで、一日一回坐浴をして、浴後安靜に臥るがよし。温泉も鹽類泉に一日一二回入るのは有効です。寒い時には風邪を引かぬやうに注意するは勿論、腰部は一般に温かにせねばなりません。かくして身體に抵抗力がついた上は、冷水摩擦も有効です。但し冷水浴、海水浴は、一般に良くないことになつて居ります。世人は營養と云へば、直に高價の營養劑を服めばいいやうに考へますが、これは消化力のない病人の服むべきもので、消化力のある人には全く無用のものです。のみならずこれのみを常用すれば胃腸がこれになれて消化力を弱め、結局高い金を拂つて、消化器を弱めると云ふ二重の損となります。それよりも食物及び生活を規則正しくし、食べられたものを十分食べて、適宜に運動し、消化を十分にすることに越したことはありません。重病後恢復期に月經

のない時も、その手當は以上と同じですが、只消化力なきため食物を節し、適當の滋養品と補血剤を用ふる必要がありませす。

無月經が生殖器の故障に原因するものは、婦人科醫の局所的手當によらねばなりません。子宮の發育の悪いのも、或る刺戟を與て發育を促し、或は卵巢其他の臓器の製劑を注射などして、爲に妊娠した例もあります。通例の通經藥は比較的効力の薄いものです。

(七) 月經過多症

月經の分量は人によつて多少があるもので、普通は全部で二百立方センチメートル、即ち我一合餘と計算されて居ります。然し實際はそれを量るにも困難ですし、事實分量が多くても、左ほど感じないこともあり、少量でも多く感ずることもあり、旁々その分量の多い少ないと云ふことは、左ほど重要なことではなく、

何か著しい障害がない限り、その多寡は大して心配するには及びませせん。然し月經中貧血して顔色が蒼くなり、甚しく疲勞して元氣が衰へ、または心悸亢進、神經興奮等の症狀が現はれることがあれば、それは最早普通の状態ではなく、病的なものに見ねばなりません。少くとも月經時に右の如き症候を呈すれば、月經の分量如何に拘らず、月經過多症と見て、相當の手當を加へる必要がありませす。

(八) 過多症の原因と手當

月經過多症は種々の原因から起ります。先づ子宮病としては内膜炎、子宮後屈子宮筋腫などの腫瘍、卵巢または喇叭管等の病氣からも來ませすし、全身病としては、血液の性質が悪いため多いものもあり、或る種の傳染病の時にも過多症を誘發し、心臟腎臟病も過多の原因となり易いものです。また普通ならば月經の少なくなりさらな病氣、例へば貧血や肥胖症等の場合にも、却つて多くなるともありませす。

す。尤も少女時代に別に原因なく、單に感冒に罹つたとか、過度の運動や精神過勞の時などに、不規則の月經を見ることがあります。また四十歳前後になり、更年期の症候として、一時過多になることもあり、癌腫の時も過多症に似た症候を呈することがありますが、それ等は共に所謂過多症とは別のものです。

月經過多症を療治するには、無論原因を究めて、それに向つて治療を加へねばなりません。月經過多と云ひ、前に述べた無月經と云ひ、共に或る原因から來た結果ですから、その本を確めずして、單に藥だけでその末を調節せんとするのは、抑も見當違ひのことです。また實際これを調節する藥は、その効力比較的薄弱なこともあり、また、縦令を試みるにしても、そのみでは到底満足な結果は得られません。

(九) 月經困難

月經時には腰が痛むとか腹が痛むとか、誰でも多少何かの障害は起り勝ちのもので、然しそれが度を超へて強く起り、例へば下腹部や腰が強く痛んだり、腰が酷くつれるとか、下腹緊満、氣分勝れず、疲勞の感が殊に甚だしいとか、凡てが普通に増して強く起るのを、これを月經困難症と云ひます。同じ痛みも間斷性に軽い陣痛の來ることもあり、または腰から腹と位置を轉じて痛むものもあり、或はまた持續的に痛むものもあります。これ等は多く腹部に起りますが、時として右とか左とか場所を定めて痛むものもあり、さうでないものもあります。また時には乳房が痛むこともあり、食慾が減退したり頭痛を起したり、甚だしいのは床に呻吟するものもあります。これ等の障害は月經前數時間、または數日前から起ることもあり、月經開始と同時に來ることもあり、稀には月經開始後二三日目に起る人もあります。

(十) 月經困難の原因と手當

月經困難は多く婦人科的病氣に原因し、子宮内膜炎、子宮實質炎、子宮筋腫などの場合に起るものです。また全身的の貧血、神經質の人にも起ることがありますし、風邪または腰部を冷すなど、月經時の不衛生からも起ります。或はまた卵巢の發育が普通で、子宮の發育不十分な場合などにも、月經困難となることがあります。また月經に對しては精神的の影響が多く、平常精神を勞することの多い、社會的地位の高い婦人には、特に月經困難症の多い傾きがあります。また月經時毎に精神的發作があつて、一時的精神病者のやうな状態になる人もあり、癲癇ヒステリーなども、月經時に特に増悪することがあります。

月經困難の傾きある人は、月經時に特に安静にして、寒い時であれば全身を暖かにすると同時に、フランネルでも腰に纏めて腰部を暖め、夏も腰や足を冷さず

湯冷めを氣をつけねばなりません。同時に便通をよくし全身の營養にも特に注意する必要があります。若し精神を多く使ふ人であれば、月經數日前より肉體も精神も共に安静にして安臥し、便通をよくする必要があります。この場合冷水摩擦も效力があります。何れの場合にも醫師の診察を受け、その由つて來る原因に向つて治療を加へねばなりません。

月經困難の場合に、強い鎮痛劑を用ひてその痛みを止めることは出來ますが、原因を放擲して鎮痛劑だけを永く飲んで居ると、その中に薬に慣れて、遂に中毒を起し、更に他の病氣を作ることになりますから、是非根本の原因から治療して行かねばなりません。これに就て婦人科醫として患者に注文したいことは、一二ヶ月で平癒しやうと思はずに、氣長に辛抱して根本的に治療することです。中には治療の效果の遅々たるに焦れて、中途にして廢す人がありますが、醫師が強い薬によつて一時道れに痛みを止めないのは、寧ろ患者に對する親切です。それを

焦れ出しては、折角の親切を無にするばかりか、何時まで経つても根治する機会はないこととなります。

### 第六章 更年期の注意と子宮癌の警告

#### (一) 更年期の養生

月経時代から經歇期にうつる境目なる更年期は、少女が成熟せんとする破瓜期と共に、婦人の一生涯に於て、身體および精神上に、一大變化を起す時期であることは前に述べた通りであります。この時期は通常四十六七歳のころに起るものですが、偶に例外として四十歳以前のこともあり、または遅れて五十歳を超えることもあります。何れの場合も劃然たる境をつけて、經歇期に移ることは尠く、人によりては一年、時には二年以上もかゝることもあります。然し稀にはその時期が極めて短かく、突然經歇期に入つてしまふものもあります。

この時期の主なる徴候は、月経が不規則になり、次第に減少することで、稀に

は却つて過多になる例外もありますが、通常分量も遞減して、終に經歇期に移つてしまひます。この最後の著しい一般的变化は、全身肥滿して脂肪づき、同時に心臟腎臟などの内臓の周圍にも、脂肪が殖えて動作活動が鈍くなり、従つてまた益々肥滿すると云ふ結果になりますから、更年期の養生としては、成るべく家内の仕事をまめにして運動を助け、食物も澱粉脂肪類を避けて、蛋白質の多い物を選び、且つ常に便通をよくすることに注意せねばなりません。

(三) 脱落現象

更年期によく起る故障は、下腹痛、下痢、腸殊に直腸出血、鼓腸等をはじめ、逆上せて顔がほてつたり、急に汗が出たり、沈鬱、恐怖觀念、心悸亢進或は不眠、頭痛、眩暈等起し、甚だしきに至つては稀に卒倒する人もあります。その外一體に記憶が悪く判断力も鈍るのが常で、これ等の現象を機能殺滅現象、または缺

落現象と云つて居ります。手術によつて双方の卵巢を悉く剔出した後も、丁度これと同じ現象が起りますが、これは卵巢に一種の内分泌作用があつて、それが平生一定の影響を身心に及ぼして居たものが、急にそれが無くなつた結果、平衡を失ふためであります。避妊等の目的を以て、双方の卵巢に X 光線をかけた後にも、同様の現象が起ることがありますが、然しこの場合は、手術で全部剔出した後ほど、強くないのが通則です。

右の脱落現象は、勿論凡ての人に皆な現はれて來る譯でもなく、時には全く無いこともあります。また現はれたとしても、人によつて強弱の度が違ひ、割合に早く濟む人もあれば、稍長く持續するものもあります。偶にはまた月經の周期に相當して、發作的に起る人もあります。

(三) 子宮癌

更年期に特に注意すべきことは子宮癌です。すべて癌腫は或る例外を除けば、若いうちには出ないもので、子宮癌も多くこの更年期を中心として起ります。癌腫は男女を通じて云へば、胃癌が最も多數を占めますが、女ばかりに就て觀れば、最も多いのはこの子宮癌で、これが更年期に近く芽を萌し、油断して居る間に、忽ち手の下しやうのない大事に立ち到るのであります。

子宮癌の外部に現はれる著しい症候は、初め白帯下があつて、次で不規則の長期の出血があります。俗に長血と云つて居るのは、多く子宮癌の出血を指して云ひます。所が更年期は前に述べたやうに、既に月經の不規則になる時ですから、往々この癌の出血を見逃して、普通更年期にある現象と速断し、その儘に放任して大事に至るものが少なくないのであります。また素人は多く、癌には臭い分泌物があるものと思つて居りますが、然し必ずしも臭気があるとは限りません。勿論それが進んで腐敗を起せば非常な臭氣を發し、患者が治療室に入つて來れ

ば、その特種の臭氣と顔付きだけで、直に癌だと知れる位ですが、初期のうちには必ずしもこの臭氣はなく、臭氣がある位になれば、多くは既に治療の時機を失して居ります。一般に死の宣告のやうに恐れる癌も、早期に醫師が発見すれば、根治することが出来るのですが、唯だ素人が疑いを起して診察を求めるときは、多くは時機を失して居て、醫師の努力も及ばなくなつて居るのです。そこで更年期に於て普通よりも多い出血があるか、又は月に數回出血がある場合は、他に何等の苦痛がなくとも、必ず婦人科醫を訪ふて診て貰ふ必要があります。

(四) 癌は不治の病にあらず

總て癌の恐るべきは、その組織が非常な勢を以て周圍に進み、目に見えない所まで深く根を蔓らせること、組織の一部が血管の中に侵入し、血中を流れて思ひがけもない所に飛火すること、縦令患部を取去つても、竹の根が残つて芽を



出し、または隣の庭に蔓つて出るやうに、外に擴がつて行くのであります、そこで癌と見ればそれほど蔓らぬ間に、早く周囲と共に取去つてしまふのが今日の治療法で、早期にこれを取去れば根治することが出来ます。尤も近年はエツキス光線やラヂウムで、癌腫の發育を防ぐことが出来るやうになりましたが、然しこれは唯だ手術が不可能の場合、または手術不十分の場合に、補足のために用ゐるとか、若くは患部が甚だしく悪くなつて、手術が出来ない時に、之によつて患部を小さくし、手術可能な状態にするために應用するもので、單にこれ丈で根治することは、今日の所では困難なことです。

(五) 子宮筋腫

子宮癌は子宮の内面を被ふて居る組織のみが、濫りに殖えて腫瘤となつたものですが、子宮の實質即ち筋質だけが、盛んに増殖して腫瘤となつたものを子宮筋

腫と云ひます。若い時に子宮にこの筋腫などがあつた場合に、これを早く除らなければ、後に悪性の腫瘍に變化したり、または腐敗化膿することも時にありますから、更年期以後時々監督的診察を受ける必要があります。尤も子宮に筋腫のある人は、一般に更年期の來るのが遅いもので、一面から云へば五十歳を超へても更年期に達しない人は、癌でなくとも筋腫があるかも知れませんから、一應診察を受けて警戒する必要があります。要するに更年期にあつては、これ等恐るべき病氣があつても、つひそれを見逃しやすい状態にありますから、従つて治療の時機を失する恐れがあります。この點は特に注意して、苟も異状を認めた場合は遅滞なく診察を受ける必要があります。それが注意深い人の取るべき途であります。



(婦人壽草)

姪  
娠  
篇

第七章 妊娠中は如何に注意すべきか

(一) 最初の注意

妊娠は、普通の場合であれば、素人でも容易く識別することが出来ますが、然し素人が軽卒に獨斷するのは、望ましくない場合もあります。唯だ一般婦人が、妊娠ではあるまいかと云ふ、疑を起すだけの知識を持つて居て、若し妊娠らしいと云ふ疑が起つた場合は、産科醫又は産婆に診て貰ふことが、兎にも角にも必要なことです。日本では多くは五ヶ月に産婆を呼んで、着帯する習慣ですが、米國あたりでは、妊娠と氣が付いた時には、先づ産科醫に診せてその監督指圖を受け、分娩の時に至つて、初めて産科的智識ある看護婦を頼むことになつて居るさうです。若し醫師にも産婆にも診せないで、獨りできめて居る時は、妊娠でも

ないものを妊娠と思つて、餘計な心配をすることもあり、時には思ひがけない間違ひを招くこともあり得ます。例へば腹内に腫瘤の出来たのや、または水の溜つて居るものなどを妊娠と誤認し、そのため治療に手遅れして、一命を棄てた例もあります。妊娠の最初の注意としては、氣が付くと同時に専門醫に診せるか、または産婆に診せるが至當のことです。

(二) 醫師と産婆

今日の産婆は少くも一通りの教育を受けて居りますから、異状のない場合はこれに委せて、信頼することが出来ますが、然しその教育には自から限りがあつて、特殊の病氣に對しては、普通これを鑑別する知識を持つて居らぬ筈です。其の上一般に産婆と云つても、現今の状況では、其の學力手腕に甚だしい甲乙がありますから、時としては飛んだ間違ひが起らないとも限りません。それが注意深い産婆

であれば、妊娠中から分娩時に起り得べき危険を豫知し、従つて醫師を招聘する時機を失ふ様なことは極めて少ないのであります。先年某産婆にある妊婦を依頼した時、妊婦の脊柱が左右に微かに彎曲して居るのを發見して、「この位では差支ないものでせうか」と私に尋ねました。これは脊柱が曲つて居る時は骨盤も歪むことがあり、従つて胎兒の通過を妨げることになりまますので、私は早速骨盤を調べましたら、差支になる程ではなかつたが、此様に微に曲つたのまでも發見したと云ふ注意深さには、大に敬服しました。又ある産婆は妊婦を診察して、胎兒の頭の下り工合がよくないので、骨盤が狭いのではないかと思つて、自分で骨盤を計りましたが、別に變りがない、或は前置胎盤と云ふ異状ではないかと云つて、私の診察を受けに參りました。其時は確診の出来る程著明の状態でありませんでした。分婉になりましたら、果せる哉前置胎盤でありました。併し前々から注意してゐたので、母子共に危険も起させずに済ませました。また或時ある

妊婦が突然腦貧血を起したと云ふので、往診して見ると、極めて輕症の子癇の疑いがありました。尿を検査したいと思ひますと、産婆はちやんと試験に供し得るやうに、既に尿を取つて置いてくれたので、早速試験をすることが出来、直ちに其の手當をしましたので、恐るべき結果にならずに済みました。此様に産婆の中には、中々威服すべき細縝の者もありまして、時として醫者には氣が付かなくて、負ふた兒に教へらるゝと云ふ様なこともあります。そんな産婆に限り、妊娠中殊に分婉中の恐るべき事柄を、よく心得てゐる丈けに、異状のない時から醫師に依頼するのを好むのが多い様であります。これに反して學識の淺い、信賴するに不十分な、従つて醫師の監督を餘計に要するやうな者の中に、却て醫者を毛嫌ひする様なのが時としてあるのは、妊婦にとつて都合の悪いことだと思ひます。然し時勢の進歩と共に此様な産婆は追々と減ずる様に思はれます。またある産婆が妊娠と診断して取扱つて居りました。スルトその婦人が頻に苦

痛を訴へて醫者に診せようと云ひますが、産婆は相當の理由と根據により、妊娠と確信して居りますから、その苦痛は妊娠に伴ふ普通の障害だと云つて、醫師に診せることも延び／＼になつて居りました。所があまり苦痛が烈しいので、後で醫師の診察を受けて見ると、妊娠でなく結核性腹膜炎で、而も大分進んで居て、遂に救ふことが出来なかつたと云ふ事實もあります。これは必ずしも産婆の手落でもなく、産婆の學力では、妊娠と診斷してよい充分な根據を認めては居つたのでありますが、腹膜炎の診斷に對する知識がない爲めに、之れを鑑別することが出来なかつたのであります。斯う云ふ例が時としてありますし、其の他實際妊娠であつても、同時に氣のつき難い異状を伴ふことも往々ありますから、安全を期するには、先づ醫師に診て貰ふに越したことはありません。但しこれは經濟上にも關係し、古來の習慣と云ふこともありませうから、今俄かに一般に望むことは出来ませんが、専門醫の診察を受け得る餘裕のある人ならば、先づ醫師に診て貰

ふのが正當でありませう。  
次に初産だから大事を取る、二度目からは前の經驗があるから、醫者は必要でないと思ふ人があります。これは飛んだ間違ひであつて、醫學上から申しますと、經産ほど警戒を要する點が多くなるのであります。妊娠中に異變がなくなつても、分娩の際思ひもよらぬ異變の起るのは、二度目から後に多いのであります。これは醫者の我田引水論ではありませぬから、追つてこの點について尙ほ詳細に述べたいと思ひます。

### (三) 想像妊娠

腹部に何か病氣のあるのを、妊娠と間違へるのみでなく、病氣でも何でもないので、ものを妊娠と誤信して、思ひがけもない滑稽を演ずることもあります。殊に平常非常に子供を望んで居た婦人に、そんな間違ひが起り易いものです。この場合に

は月經も閉止し、腹部が膨隆し、乳房も張る様に感ぜられ、悪阻の様な症状も起り、妊娠時に見る他の様々の徴候も現はれ、終には腹の中で胎児が動く様に感ずることもあります。或る外國の例では、豫定日になると陣痛まで起つたので、産婆を呼んで見たが、何うしても嬰兒が出てこない、そこで醫師に診せると、妊娠ではなかつたと云ふ實例もあります。これ等は専ら精神的作用からも起るもので、腹部の大きくなるのは、皮下脂肪が増して來た爲などであつて、胎児の動く感ずるのは、腸の運動又は腫瘤などの動くため、月經の閉止も多くは精神的影響で、陣痛は腸の痛みか何かであつたのでせう。此の種の例は想像妊娠と稱し、日本にも西洋にもあります。數年前東京で、妊娠しては面目ない筈の一人婦人が、非常に妊娠を恐れて居つたために、種々妊娠の徴候が現はれて來て、最早五ヶ月になると云つて、醫師の診察を受けに來ました。醫師が診ると例の想像妊娠ですから、その譯を云つて聞かせたら、非常に喜んで、安心して歸つたと云ふ話

があります。

(四) 妊娠中の食物

扱て愈々妊娠と定まつて見ると、誰れしも養生をしなければならぬと考へますが、その養生は、一言にして云へば、妊娠前と同様にすればよいので、たゞ妊娠中は些細の不攝生でも、激しく影響するものですから、平常に比して一層の注意を要します。飲食物の如きも、平常好んで食べたものは、何でもよいのですが、不消化物や食過ぎは注意せねばなりません。殊に山葵、芥子、蕃椒、生姜などの刺激性のものや、葱、蒜、獨活などの香りの高いもの、又は油濃いものは澤山食べないがよいのです。また強度の酸味のものも害になりますし、茶やコーヒーなど興奮性のもものは、濃厚なものを多量に飲むのはよろしくありません。酒類も平素飲み慣れた人が、少量に用ふる位はよろしいが、多量に用うることは

たは強い酒を用うることは、絶対に禁ぜねばなりません。若し毎朝胸が悪くて嘔吐の様ある場合には、寢床の中で一ぱいの牛乳、重湯、または葛湯などを飲み、一時間も経つて床を出る様にすれば、気持ちがいよものであります。また妊娠中は兎角便秘し易いものですが、無暗な薬によつて通じをつけようとすることは、甚だ危険なことです。成るべく果物や野菜の類を食し、毎朝一ぱいの冷水を飲み、適宜の散歩でもすれば、自から便通があります。同時に毎日一定の時刻に便意の有無に拘らず上圖して、便通の習慣をつけると、自然その時刻に通じがあらる様になります。

(五) 妊娠中の仕事

仕事も平常仕慣れたものは差支へなく、殊に日常の家事を處理する位は差支へありませんが、たゞ過度に働かない様に氣をつけねばなりません。先年ある教師

が、妊娠中にも拘らず、その職務に對する趣味と責任とのために、押して勤めて居ました爲め、遂に六ヶ月で流産をしました。何處までも過ぎない様に注意するのが肝腎で、例へば裁縫なども差支はありませんが、長く坐つたり努めしたりすることはいけません。洗濯や張物なども、長時間に亘る労働は見合せたがよろしい。重い物の上げ下しや、階段を頻繁に昇降する等もいけないが、低い棚にある物を下す位は構ひません。これ等は平常の慣習と關係のあるもので、日常労働に慣れて居る婦人には何でもないことでも、労働に慣れない人にはいけないことがあります。要は強い腹壓を腹部に加へない様にすればよいのです。殊に下腹部に疼痛又は緊張を感じる時、若くは胎児が下位に降つた感じのある時は、出来るだけ安静を守り、産月に近づいたならば、尙更注意せねばなりません。妊娠中室内にのみ閉籠り、たゞ坐臥するのみでは宜しくありません。適宜の散歩でもして、新鮮な空氣を呼吸することはよいことです。氣の張らない小集會に

出るのも差支ありませんが、劇場寄席など、長く一つの所に坐つたり空気が悪かつたり、或は又た精神上過激の感動を興へるのはよくありません。同一の理由で小説を耽讀するなども悪いことです。すべて深い心配を惹起す相談などには關係せず、業務を有つて居るものは、仕事を控へ目にし、八ヶ月ごろよりは仕事を休むのが安全であります。

(六) 妊娠中の旅行

流産の最も多いのは三四ヶ月頃ですから、若し旅行をする必要があるならば、五ヶ月より七ヶ月位までが、比較的障害が少い様です。然し何ヶ月でも必ず大丈夫と請合ふことは出来ません。

すべて流産の原因は單獨で来る場合もあるが、多くは子宮に疾患があるとか、他に病氣があるとか第一の遠因がある所へ、旅行したり運動が過ぎたりするた

め、これが誘因となり、二三の原因が相重なつて流産となるものですから、他に故障がない場合は、或る程度までは汽車旅行も差支ありませんが、何か他に故障があれば、少しのことでも流産の誘因となることがあります。それで、旅行の必要でも起つた場合は、先づ専門醫の診察を受けて見るのが、一番安全であります。人力車馬車等も長時間乗るのはよろしくありません。電車も短距離ならば普通差支はありませんが、自働車で長距離を疾走することは戒めねばなりません。

(七) 入浴その他の注意

身體の清潔はまた妊婦の養生の一つでありますから、平生の習慣に従つて入浴するのは宜しうございます。然し餘り熱い湯や、長くはいるのはいけません。浴後は湯冷のしない様に注意し、浴後暫く安静にすることが必要です。冷水浴、冷水摩擦、海水浴などは、妊娠中にはいけません。坐浴も濫りにしてはなりません。醫



師の方では胎児が発育し過ぎて、早く分娩せしむる必要ある時は、器械で温ためて分娩を促すこともあり、また産意を促すため、腹部を温めることがありますが、熱い湯や長風呂や、又は坐浴などは、これ等の手段と同一の結果を見ることがありますから、大に慎まねばなりません。

又時として妊娠中何ヶ月までは、夫に近いといかと思ふ様な質問を受けますが、これは道理から云へば、至極簡単明瞭な問題で、即ち妊娠と云ふことは、既に生殖の目的を達した状態ですから、妊娠と同時に最早夫婦相近づくべきものはありませぬ。殊に異状のない健康の妊婦であつても、妊娠の終期少くも二三ヶ月、及び分娩後二三ヶ月、即ち分娩の前後五六ヶ月は、絶対に謹慎すべき時期です。若し他に流産の素因其他の異状の存する妊婦にあつては、自然この禁止の期間も長くなる譯で、聊か立入つた話ですが、これ又た妊娠中の一の心得ですから、序に一言付け加へて置きます。

(八) 不注意の實例

先年或る夫人が妊娠中その姑の亡くなつた時、豫て病中看護に疲勞し切た上、極度の悲哀の爲め、強き精神的刺戟を受け、殊にかゝる場合とて用事も繁く、また我が國の習慣として通夜などをして、不規律の飲食と睡眠不足で、少からず身體を害した後、寒中長途の葬列に加はり、火の氣なき寺の本堂で、長時間端坐したりなどした爲め、諸方面より雑多の刺戟が積り重なつて、遂に子宮の收縮を來し、寺よりの歸途時をきつて下腹痛を起し、流産の徴候を呈して來ました。然しこの場合は、幸に早く手當をして事なきを得ましたが、すべて家庭に特別の出來事の起つた時は、妊婦自身が注意するのは固よりですけれど、義理や人情のため、それを知りつゝも實行し兼ねることがありますから、本人よりは周圍の人が、よく氣を付けてやらなければならぬことと思ひます。

第八章 醫學上より觀たる胎教

(一) お産に關する迷信

昔から迷信の力を藉りて、教訓を試みたものが澤山ありますが、殊に妊娠に關した傳説は中々多い。例へば柄杓から水を飲むと、柄杓の様な頭の子が出来るとか、婦人が袋から直に物を食べるか、又は袋を破らずに棄てると袋子が生れるとか、雙栗を食べると雙胎兒を産むとか、章魚又は鮑の類を食べると、其様な子が生れるとか、妊娠中に火事を見ると、胎兒に赤痣が出来るとか、或は兎を食べると兎唇の子が生れるなど、到る處種々雑多なる傳説が傳へられて居りますが、多くは理由も根據もない、牽強附會の説に過ぎません。

然しこれ等の傳説の中には、その説こそ荒唐無稽のものなれ、多少教訓的の意

味を含んだものもありまして、行儀を慎むことを教へ、或は精神に大なる感動を興ふることを避けしむるが如き、或は妊娠中不良の食品を戒むるが如き、幾分か妊娠中の嗜みを教へたものもないではありません。

(二) 傳説の價値

香月啓益著「婦人壽草」に、「妊婦火災の時に火を見るべからず、心氣を驚動して胎氣安からず生子必ず身中に赤痣出来るものなり、私俗之をほやけと云ふ」とあります。ほやけは火焼の意でせうが、赤痣は多く皮膚面の血管の擴張か、或はその増加によるもので、何も「火」と關係する所はありません。然し妊婦が物に驚くのは、醫學上よくないことは明かで、妊娠中火事を見るなど云ふ傳説は、この點に於て一部の教訓を興へて居ります。

兎唇の出来るのは、胎兒が胎内に發育して顔面が左右から相合するに當り、こ

れが十分合しなかつたために起る畸形で、生理上左ほど不思議なことではありませぬ。柄杓の子と云ふのは、恐らく半頭兒のことでせうが、これは羊水の量の異状等より起る畸形で、柄杓と關係のあらう筈はない。その他牛を酷使すると牛の様な手足の子が出来ると云ふのは、指の癒着したもので、鶏を虐めると鳥足が出来ると云ふのは、多指症を云ふものらしく、外科の専門醫などには左ほど珍らしいことではありませぬ。

(三) 進化論と胎兒の發育

獵夫が殺生をして狸の子を生んだとか、熊の子が出来たと云ふ様なことは、祖先歸り（アダプキスムス）の説で説明が出来ます。進化論者は我々人類は動物から進化したもので、それが往々祖先に歸ることあるを教へて居ります。時々徴兵検査の際、尾のある人を發見するのもその一例で、偶々尾の遺物たる尾骶骨が

長く突出したものであります。この外副乳と稱し都合二對の乳をもつて、獸類時代の面影を存するものもあります。尤も副乳は極めて小さなものですが、私共は婦人を診察中に度々發見します。これは男子にもあります。或はまた全身毛が生へて狸の如きものもあります。これ等は皆祖先の或時代の状態に、一時復歸したもので、今日の學問では相當の説明が出来る様になつて居ります。胎兒が胎内に宿つて發育する順序を見ると、祖先以來の進化の跡を繰返して居ります。胎兒の初期一ヶ月半は胎芽と稱し、唯だ一の生物であるだけで、人の子だか、動物の子だか一寸區別がつかず、尾もあれば鬚もあります。恰も木の芽が葉になるか花になるか、判らない様な状態と同様であります。それが段々發育して人類の形體を具へて來ます。即ち胎兒の發育には、何億萬年前の單細胞生物より、今日の人類にまで進化して來た要點を、二百八十日間の發育に繰返すものでありまして、生れた子が偶々祖先の或時代に歸り、毛が多かつたり尾が有つたり

するのは、當然あり得べきことで、一向不思議なことではありません。

(四) 胎教の本意

妊娠中の母の精神状態が、その儘子に移つて行くと言ふ説は、昔から唱へられて居ますが、最も著しい例として多く引證されて居るのは、周の文王の母太任のことで、小學の内篇稽古第四に「太任は文王の母摯(國の名)の任氏の中女なり。王季娶つて以て妃と爲す。太任の性、端一誠莊、惟れ徳之れ行ふ。其文王を娠むに及びて、目に悪色を見ず、耳に淫聲を聴かず、口に傲言を出さず、文王を生みて明聖なり。太任之を教ふるに、一を以てすれば百を識る。卒に周の宗と爲る。君子太任は胎教を能する事を爲すと謂ふ」とあります。我國では伊藤仁齋の夫人が妊娠せられた時、仁齋先生は毎夜孝經その他聖賢傳の佳書を讀みて、之を聞かせられ、その生まれた子が後に博識の君子、伊藤東涯先生となつたのであ

ります。こんな話は西洋にも澤山傳へられて居ります。ある婦人が妊娠中會堂に壁畫としてある聖像を、毎日の様に見つめて居つたところ、生れた子供が實に神の様な子であつたと云ふ話もあります。又埃國の有名の大音楽家モツアルト氏が母の胎内に在りし時、母は終日音楽を嗜んで居つたのだが、其後母が音楽を罷めて後生んだ次男は、樂才全く平凡であつたと云ふことであります。その他同じ母にして、不遇の時に生んだ子は不良であり、順境の時には良い子が出来たと云ふ様な話しも、内外を通じて少からずあります。これを胎内教育即ち胎教と稱し、東西共に一部の人より甚だ重く見られた所であります。

やはり小學の内篇立教第一の中に「烈女傳に曰く、古者婦人子を娠めば、寢るに側せず坐するに邊らず立つに蹕せず、邪味を食せず、割(料理)して正しからざれば食せず、席正しからざれば坐せず、目に邪色を視ず、耳に淫聲を聴かず、夜は則ち瞽(盲人)をして詩を誦し、正事を道はしむ。此の如くすれば則ち生る、

子形容端正にして、才人に過ぐ」とあります。然し割して正しからざれば食はずとて、餘り偏屈に制限するもよろしからず、前に云つた通り食ひ慣れない料理は食はないと云ふ意味に解釋すればよろしい。席正しからざれば坐せずとて、始終端坐して居るのもよろしからず、その邊は程度問題で、自墮落にするなど云ふ意味に解し、成るべく氣樂にするがよろしうございます。別に替者と呼んで詩を誦し、正事を道はしめたからとて、胎内の子が良くなるものでもありませんが、此の如きことにまで注意するほどの、徳の高い婦人の子は、その遺傳のために良い子が出来ると思はれます。前に云つた同一の母の子にして、その性質の異なるものあるは、必ずしも妊娠中の境遇のみにより説明しないでも、遺傳の支配を受くると考へても宜しい。即ち同じ父母より生れた兄弟が、各々異なつた性質を有するのは、或るものは親に似、或るものは祖父父母又は祖先に似るからであります。

(五) 遺傳の研究

近年は遺傳の研究も中々盛んになつたやうですが、既に今より數十年前も前に、埃國のメンデルと云ふ人が、次の様な面白い實驗をしました。

初め黄色の豆の結る豌豆と、青色の豆の結る豌豆とを庭に植多、黄色の方の花粉を青色の方の雌蕊に付け、或は其の反對にして兩方の合の子種を造つて見ました處、其の子たるべき豆は皆黄色ばかりでありました。此の子供たる豆を蒔いて、其花から合の子を造つて見たら、其孫に當る多數の豆の約四分の三は黄色で、約四分の一は青であつたと云ふことです。其後他の植物や動物で驗べて見ると、之れと同様な結果を得るものもあることを知りました。例へば穀の無地な蝸牛と縞のある蝸牛とで、今の豆と同様の實驗を試みた處、やはり同様な結果を得たと云ふことであります。今假に此の豆の黄を善、青を惡と見ますと、其の孫の

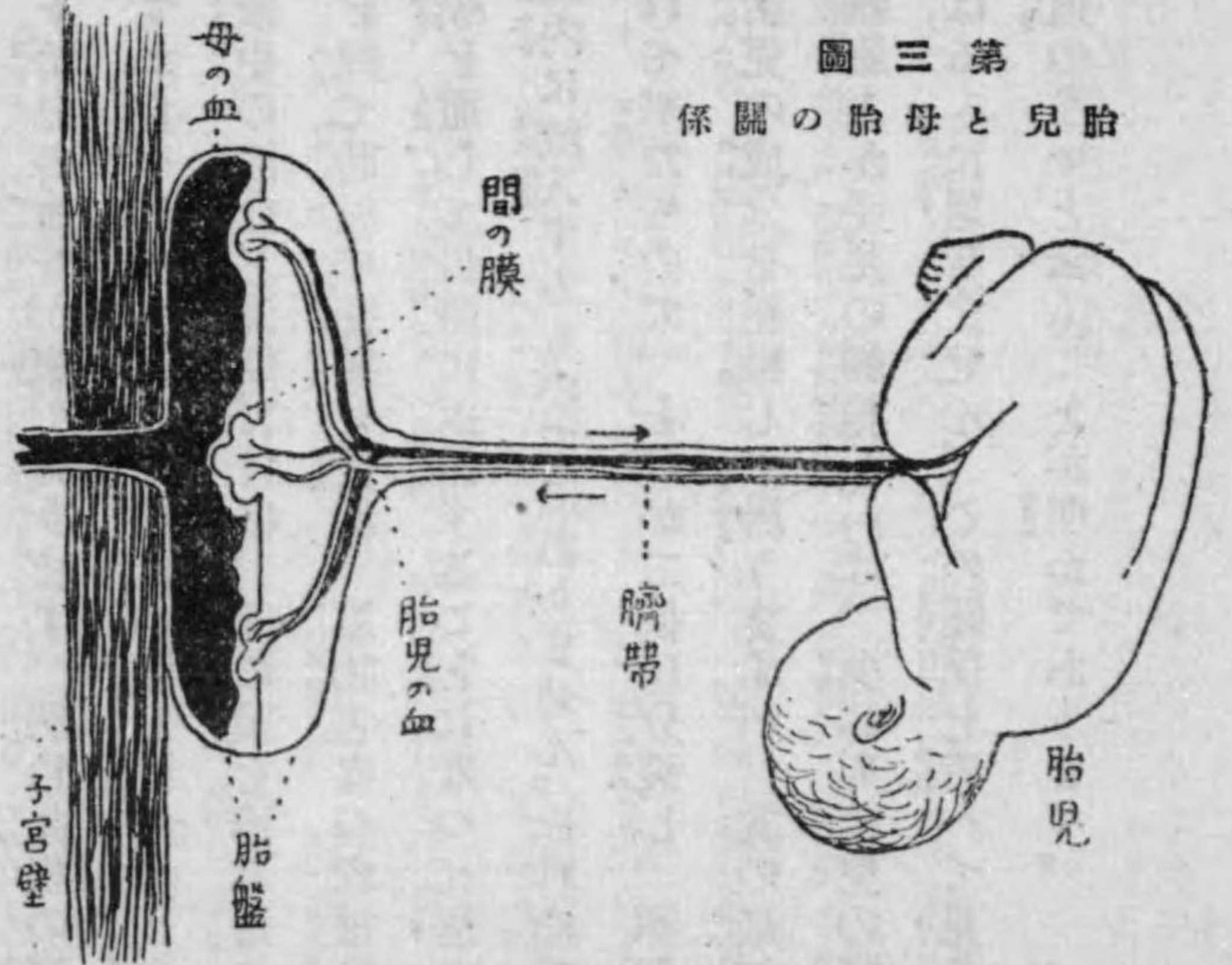
兩親は共に黄即ち善であつたが、孫は同じ兄弟でありながら或は善もあり或は悪もあつて、親に似ない子も出来る。然し前に逆つて見れば、祖父母の何れかに似たと云ふことになるのです。

又ある人は、黄色の花の「おしろい」と白色の花の「おしろい」とを合せて變種を作つたら、其子は桃色とか、赤とか、親に全くない色を呈したと云ふことも實驗しました。又黒鼠と白鼠とを交尾させますと、黒や白と限らず、茶色とか鼠色とか全く親に似ぬ子が出来ます。此様に或る子供が全く親に似ないからとて、敢て不思議ではありません。時としては其の祖父母曾祖父母或はずつと以前の祖先の性質などを受けることもあります。

(六) 母體と胎兒の關係

從來信ぜられた胎教の様に、妊娠中母の精神が、その儘子の精神に移るもので

あるか何うかは、母體と胎兒との連絡を考へて見れば解ります。即ち前に述べた通り妊娠中母の領分は子宮壁まで、胎兒の領分は臍帶までに限られてゐます。そして其間に介在する胎盤



第三圖 胎兒と母の關係

は、一部は母の成分で、一部は胎兒の成分から出来て居ります。先づ胎盤に於ける成分の中に母の血管がありまして、其中に胎兒の成分が草木の根の様な有様で侵入して居ります。この根の

様なものには、一々胎児の血管が来て居ります。然し此根の様なもの、表面には相當の膜がありますから、形のある成分は此の膜を通して出入することは出来ませんが、母體の血液の中の液分と瓦斯だけは、此の膜を滲み透して胎児の血液の中に入り、臍帯の血管を経て胎児の營養を營み、廢物となつた液分と瓦斯だけが胎盤に来て、再びこの膜を通して母體に返還することになつて居るので、母體の血液は、その儘胎児の體内に流入するものではありません。それゆゑ受胎最初の卵子一個は、母體から分れて來たもので、それが二個に分裂し、四個に分れ終に無數の細胞となり、以て胎児の成分を組織して居りますが、其の最初の一つの細胞以外には、母體の腦の細胞とか手足の細胞とかは、少しも胎児の體内には來らず、唯だその滋養分で養はるゝに過ぎません。この關係を考へて見ると、母の精神がその儘胎児に傳はる道のないと云ふことが明かであります。

(七) 胎教の價値

かやうに見て來ると、胎教と云ふことは全然價値のないもの様に思はれますが、妊娠中母體の精神状態が、胎児の精神に全然無關係と云ふ譯でもありません。凡て精神と肉體とは大なる關係がある、怒れば心臓の鼓動を亢め、血液の循環を過激にし、顔色を變じ、唾腺の分泌を盛にし、口角泡を飛ばしめ、甚しい時は口も利けなくなつたりします。之に反し喜樂あれば、心臓を適度に興奮し、血行を良くし、消化液等の分泌を増進し、従つて消化作用を佳良にし、營養良好となり、身體を健康ならしめます。又悲哀や心配があれば、涙腺は興奮しますけれども、消化腺の分泌は減少し、食慾減退し、營養衰へ、髪の毛が早く白くなつたりします。驚怖の時は、心臓は濫りに鼓動し、甚しい時は一時其の搏動を止むることさへあります。そして顔面は蒼白になり、汗腺の分泌は盛になり、冷汗を流

し、時には言語をさへ發し得ず、足腰も立たなくなり、あまり強き驚きは子宮筋肉の收縮を起し、爲めに流産早産を來すこともあり、

此の如く精神の肉體に及ぼす影響は、存外著しいもので、女子は男子よりもその影響を被り易く、殊に妊娠中は身體の經濟異常にして感動し易く、而も其の喜怒哀樂の肉體上に及ぼす影響も多く、従つて之が胎兒の營養に關係を及ぼす譯であります。そして胎兒の身體が丈夫なら、従つて胎兒の精神状態も良好となる譯ですから、つまり母體の精神状態は、間接に胎兒の精神を左右し得るとも云ふことが出来るのであります。されば從來の胎教の説は全然蔑視することなく、唯これをその儘呑みにせず、適宜に斟酌して考ふれば、その中から有益なる教訓を得ることも出来ると思ひます。

### 第九章 妊婦に腹帯は必要なりや

#### (一) 我國特有の五月帯

妊娠五ヶ月に及べば腹帯を締めるのは、我國上下一般の風習となつて居ります。昔からいはた帯と稱し「五月帯」或は「岩田帯」又は「齋機帯」等の文字を當て、藻鹽草には「ゆはた」とあり、月村聞書には「いはた帯」とあり、他の書には「いわた」と書いてあるものもあります。また三賢一覽には「しるしの帯」とあり、源氏物語には「いとほづかしと覺ゆる腰のしるし」と書かれ、吳竹集には「人知れず肌をひすぶいはた帯、心苦しき時をこそ待て」とあり、昔からいろいろの文字を當て、來ましたが、もとく祝の意味がある所から云へば「齋機帯」も當りませうが、最も近いのは「結肌」の文字でありませう。支那ではこれを



鎮帯或は縷帯と云ひ、今日醫學上の術語としては單に腹帯と申します。

一般に腹帯を締めるのは我國だけの習慣で、支那にもなく西洋にもありません。尤も支那には、比較的新しい時代に着帯の記事が見え、元の永寵姫が着帯した記事があり、明の陳朝階の「奚囊便方」に軟絹布を以て腹を纏ふとあるさうですが、これは必ずしも我がいはた帯と同一とは思はれません。我國でもこの風習は神功皇后以後のことであつて、皇后三韓征伐の門出に當り、腹帯を締めて鎧の引合を合せ、再び本土に歸るまでは産のない様にと祈願して御出征になり、後筑紫の伊都の縣に凱旋の上、目出度皇子を御安産になりましたので、以來上つ方で、その目出度いことに肖かりたいとて、皇后の腹帯に倣ひ、後々はそれが一種の儀式となつて廣まつたとか云ふ傳説があります。歴史を見ると、待賢門院の崇徳帝を孕まるゝに當り、着帯の式が出て居り、建禮門院の安徳帝に於ける時も同様の式あり、頼朝の奥方も着帯した記事があつて、當時皇族顯門の間に廣く行

はれたらしく、鎌倉時代には上下一般に普及して居つた形跡が見えます。

(三) 五月帯の目的

いはた帯の起原は右の如き歴史があつて、その當初の目的は目出度き幸先を祝ふ、安産を祈願すると云ふ、一の祝福の儀式に過ぎなかつたのです。所が後世に至つて、この單純なる目的に満足せず、これに無理な説明をこぼつけて、遂に産のために、必要缺くべからざるものゝ様に誤解し、腹帯を締めないと乳汁が出ないとか、或は胎兒が發育し過ぎて産道を通らなくなるから、成るべく強く締めねばならぬなど、飛んでもない誤解を生じて來ました。嘗に素人のみならず、醫家までも同一の説明を試み、或は腹帯は胎兒の上衝を起さないためにするとか、又は上昇血量即ち今日の急性貧血を防ぐために必要であるとか説明して來ましたが、今日の學理から云へば、必ずしも全部妥當の説とは云へません。たゞ其中に

一部の眞理がないではありませんが、然しそれは用ひ方によるもので、從來の如く狭い帯を堅く締めるのは、必ずしもその目的に副ふものではありません。殊に俗間誤解の上に迷信を加へ、特に或る神社や寺から出した帯を締めると、醫師や産婆の助けを借らずして安産すると云ふが如きは、一面に精神上の安心を與ふる利益もありませうが、また弊害が全くないとも申されません。

(三) 徳川時代の腹帯廢止論

そこで吉宗將軍時代に賀川玄悦と云ふ産科の大家が出て、いはた帯の害を極論し、その著「子女子産論」に於て、腹帯全廢論を主張しました。その要旨は、天地は至仁を以て其の徳となし、生々を以て其の化となす、故に生物は自然の儘にして置けば發育する、家の下の竹は自然に曲り、盤石の下の草根は長き年月生えずして時を待ち、石を除れば自然に發生する、妊娠もまた同様で、徒らに人工を

加ふるは、却て自然の發育を害するものである。腹帯は神功皇后以後のもので、上古はかゝるものなくして間に合つた、禽獸草木を見るも、孕んで腹帯するものは一つもないではないか。強て腹帯を用ふれば害を醸し、お産に際し後産残り、弛緩性出血を來し、急性貧血を起す恐れがある。且つ腹帯を以てその腹を緊縛すれば、胎兒の運轉母體の運動と一致するを得ず、爲めに胎兒の位置に變狀を來し、危険の症狀に陥らしむる恐れがあると云ふのであります。玄悦先生のこの腹帯廢止論は聊か極端ではあります、一面の眞理があつて、當時先生の門下を初め多數の産科醫も之を信じ、爲めに一時腹帯廢止論が盛となりました。之に對して立野龍貞と云ふ先生の反對が出て、腹帯は長い間の習慣であるから敢て害はない、草木と雖も人の培植灌溉を要するではないか、家鴨の卵を孵すには鶏を要するではないか、自然には常に人工を加へねばならぬ、妊娠も養生して保護せねば、至仁の徳を完ふすることは出来ぬとて、切に無害有効論を主張し

ました。

(四) 人工は例外なり

今日の醫學上から云へば、以上何れも極端に偏したもので、玄悦先生の説の如く、人の妊娠分娩の機能は微妙なもので、自然に任せて置けばよいが、然し自然には時として間違ひがあります。この稀にある間違ひに對し、適當の人工を加ふることは必要であります。但し反對論の如く、常に人工を加ふるのもまた間違ひと云はねばなりません。一體最近まで一部の醫家は、兎角人工を加へ過ぎる傾きが、ありはしなかつたかと思はれます、實際に醫師の手を要する場合は、僅少の例外に過ぎずして、其の例外の多くは、臨時に突發するものですから、百人が百人まで醫師の臨産監督を要する譯になります。然るに素人はこの道理を誤解し、殊に或種の家庭では、醫師を迎へた上は何か仕事をして貰はねば氣が濟まぬ

様な風があつて、醫師も亦た必要のない人工を加へ、爲めに自然に放任して濟むべきを大事に至らしめ、生命を傷け、または將來に苦痛を貽す例もありますから、醫家も産家も大に戒むべきこと、思ひます。

(五) 害のない腹帶

腹帶の害は、狭い帶で緊く締めるから起ります。狭い帶で緊く縛れば、胃腸その他内臓の機能を妨げ、妊娠中の子宮の擴大に不平等を來し、従つて産後に胎盤の滯留、延いては弛緩性出血の大危険を醸すに至ります。また子宮腔内は倒卵圓形と云つて、卵を倒さにした形をして居る筈のものです。帯で緊く縛るとその形に變化を起し、従つて胎兒の位置に異狀を來し、難産の基ともなり、また流産早産の原因ともなります。よく素人考へで、緊く縛れば胎兒の過熟を防ぎ得るやうに思ひますが、胎兒は羊水と稱する液體の中にありますから、腹を縛つたから

とて發育を妨ぐることは出来ません。若し強て發育を害するほど緊縛すれば、胎盤臍帯等の血行を妨げ、貧弱な子が出来るか、或は死亡を來さないとも限りません。それゆゑ如何なる場合にも、濫りに緊く締めるのは嚴禁せねばなりません。從來のいはた帯は木綿巾を四つに疊んで締めましたが、これは徒らに害があつて少しも利益がありません。若し腹帯を締めるとならば、木綿巾を其儘または半折にして七八尺、平等に廣く軽く巻くぐるく巻いて置くか、或はフランネルの布切を保溫の意味で用ふるの、利益があつて害がありません。腹帯として種々の製品も賣つて居りますが、緊縛せずして適度の壓迫を加へ得、且つ保溫の目的が達せらるゝものならば、何れでも用いてよろしうございます。

(六) 腹帯の利益

妊婦の腹の突出て居る時、殊に經産婦にありては腹が出やすいもので、自から

重心が前に偏つて、歩行に困ることがありますが、この場合に軽く腹帯を巻けば歩くに都合がよろしい。尤もたとひ重心が前に偏つても、妊婦は自然に反身の姿勢になつて、或る程度までは知らずく之を調節しますから、總ての人に必要と云ふのではありません。

岩田義玄氏は「助産之槩」に於て、妊婦の腹帯は神功皇后の壯舉を記念し、國民の士氣を鼓舞する資料にし、且つまた妊婦が朝夕攝生上の注意を喚起する徽章となし、單に之を物質的一偏のものとなせず、精神的方面にも大に善用させたいと論ぜられました。それも大によろしいことと思ひます。また妊婦は總て神經質になつて居りますから、腹帯によりて安産すると思つて居るならば、締めて安心させるがよい。殊にお宮から出た帯を後生大事に締めて居る迷信家から、強ひて奪ひ去るにも及びませんが、たゞ不潔な帯は決して締めない様に注意せねばなりません。

産後の腹帯は殊に利益がありまして、適度に腹帯で締めて居れば、腹壓を助け排便排尿等に便利です。この場合には長さ三四尺の木綿を三枚重ね、腹の所で一枚々々に右左交互に重ね合せ、最後の一枚は端を五六本に裂き、左右から一本づゝ斜めに組合せ、終りの一本で結んで置きますと、締まり工合もよく、診察をするにも取替へにも便利です。

(七) 腹帯の必要なる場合

今日の學理上、特に腹帯の必要なる場合があります。それは前に特種の例外は人工を要すると云つた場合で、羊水が餘り多過ぎる場合とか、胎児の位置に異状があつて、これを正位に直した後、再び不良の位置に戻らない様にする爲めとか、又は懸垂腹と稱し、腹部が著しく前の方に下がる場合などに、特に適當な腹帯を必要といたします。西洋では平生コルセットをはめて居て、妊娠中は却て之を

除るのでありますが、斯る特別の場合に限り、醫師がそれ／＼工夫した適當の腹帯を締めさせます。これは多くは皮とかフランネル等で製するもので、我が腹帯の如き單純なものではありません。その如何なる場合に、かゝる特別の腹帯を必要とするかは、今日の産婆も心得て居る筈ですから、其の例外を除いた普通の腹帯は、總て産婆に一任して差支ないのであります。たゞ返す／＼も狭いので緊く縛るのはいけないと云ふことを、記憶して置かねばなりません。

第十章 惡阻の手術とその原因

(一) 惡阻に二種ある

惡阻は妊娠して二三月に起るを常としますが、稀には最終月經の閉止後、數日にして起ることもあります。普通食物の嗜好が變つて來て、酸ばいものを好むとか、平生嫌ひのものが好きになるとか、或は食物でないものを食べたくなつたり、若しくは著しく食慾が減退したり、生唾が出て惡心嘔吐を催し、朝の食膳に向ふと、突如嘔きたくなり、嘔いてしまふと、拭つたやうに氣分がなほります。こんな工合で、軽いものは之を一種の生理的のものと認めて、單に妊娠時嘔吐症と云つて居りますが、重いのになると、其他に種々の症候が加はります。それを特に惡性妊娠嘔吐症、又は頑固性妊娠嘔吐症と云つて、一種の病氣と見

て居ります。然しこの兩者は全く違つたものではなく、只重いと軽いとの数上の度合を異にするのみであつて、何處までが生理的のもので、何處からが病的のものか、はつきりとした限界がある譯ではありません。若し強て素人に解りやすい標準を求めらば、食べたものを殆ど常に嘔くとか、食べなくとも嘔くとかして、その結果身體の衰弱を來し、瘦が目に立つて來たならば、最早單純なる生理的の惡阻を通り越して、病的となつたものと見て差支へありません。今日醫學上只惡阻と云へば、狹義に解釋して、此の病的のものだけを稱する人もあり、或は兩方共に合せて惡阻と云ふ人もありますが、昔の醫者はこの二つの區別を立てず、一般に惡阻と云ひ、或は子病などと云つて居りました。

病的の惡阻になると、案外死亡率も尠くないもので、或人は百人のうちで四十人の死亡數があると云つて居ります。近來は左ほど多くもありませんが、然し油斷の出來ぬ病氣であることは、昔も今も變りはありません。一般の人は惡阻を

普通妊婦に當然なことのやうに考へ、兎角等閑にする傾きがありますが、これは極めて危険なことで、それが醫師の診た生理的の悪阻であればよいやうなもの、病的のものを等閑にして置けば、終に取返しつかぬ大事に立到る虞れがあります。殊に通常妊娠の早期に起る悪阻ほど性質の悪いもので、それが妊娠の後半期即ち五六ヶ月以後に至るも猶ほ治らないものは、概ね豫後が宜しくないものです。普通の悪阻は大抵五ヶ月以前に治る筈のもので、五六ヶ月に及ぶも猶ほ治らない場合には、無論手當をせねばなりません。また初産婦は概して悪阻を起しやすく、一般に警戒する必要があります。

(三) 軽い悪阻の手當

生理的の悪阻も不知の間に病的に推移することがありますが、併し多くは心配するほどのことはありません。例へば朝起きたてに胸が悪いか、食卓に向つて

急に嘔氣を催すとか、突然気分が悪くなるかと思ふと、ケロリと治つて見たり、嘔氣を催す度数も一日一二回位のもので、食慾もなきにあらず、營養障害を來すほどのこともないならば、先づ大丈夫と云つてよろしいが、然しこの軽い時から注意をしないと、それが往々病的のものに進むことがあります。

生理的の軽い悪阻が起つた時には、前に述べた通り毎朝起きる前に、床の中で五勺か一合の牛乳を飲むか、又は葛湯重湯等の流動物を攝つて、三十分乃至一時間位静にして、後に起きると嘔氣を防ぐことが出來ます。食物の温度は概して冷たいものがよいが、然し妊婦の好みによつては温かいものもよろしい。液體は吐きさへしなれば、成るだけ多く飲む方が宜しく、リモナーデ、薄いサイダー、牛乳其の他刺激の少ない飲料は飲んで差支ありません。外國にてはブランドー其の他少量の酒を飲ませるがよいと云ひますが、我國の婦人にも好きな人に對しては、少しばかり清凉飲料などに混ざるのよろしうございます。元來が普通の胃

腸病と異つてゐますから、同時に胃腸病の合併してない限りは、不消化物でも氣に入つた物は案外によく納まることがあります。朝の新鮮な空氣の中で適宜の運動を試み、また水とか果物等により便通を整調にすれば、早く治すことが出来ます。

一體軽い悪阻は、多くは神経症のもので、醫師の暗示が誠によく利きます。その爲め入院そのものが一の治療法となり、入院しただけで治ることもあります。但し本人の信用した病院でなければ効能の少いことは勿論で、何處までもその信用を利用する必要があります。之と同一理由でお呪ひが利くこともあり、或は何の効能もない薬品が、妊婦の信仰により一の暗示となつて奇効を奏することもあります。昔から土器を煎じて飲むと悪阻が治ると云ふのも、この暗示を利用するものであります。褒めた話ではないが、妊婦が信ずるに於ては、これ等無害のこととは試みても差支ありません。但しこれ等が効を奏するのは軽い悪阻に限るも

ので、重くなつては中々暗示などでは効能がありません。また各種の症候に應じて、對症的に薬を用ふる必要がありますが、それ等は無論醫師に一任せねばなりません。

(三) 性質の悪い悪阻

性質の悪い病的悪阻になると、中々素人の手當や養生では治らず、段々強くなつて来て、終には食欲がなくなり、甚だしきに至つては食物を見ればかり、或は思つたばかりで嘔き、營養は次第に衰へて著しく瘦が目立ち、生唾が出て口が乾き、後には胃液を嘔いたり胆汁を嘔いたり、血をさへ嘔くやうになります。斯うなれば心臓も弱り、熱も出ますし、尿にも變化を起して蛋白質や血を混ずるに至り、黄疸を起すこともあります。また場合によつては身體に痙攣を起すこともあり、時としては精神に障害起り、燥狂状又は憂鬱性若くは記憶の障害を起す



ことでもあります。その他嗜眠状態に陥ることもあり、謔言を云つたり、耳目に障  
 害起り、妄覺を起して、見えないものを見たり、聴えないものを聴いたりすると  
 さへあります。此の様に重くなつて來ると、却て嘔氣は無くなることがあります  
 から、單に嘔氣の有無を以て輕重を判断すると、飛んだ間違ひが起ります。  
 性質の悪い重い惡阻になると、胎兒も死んで、自然流産となり、母子ともに死  
 することがあります。それゆゑ治療の二法として、或る時期が來れば寧ろ胎兒を  
 犠牲にして人工的に流産し、以て母親を救ふこともあります。然しこれは實際上大  
 問題で、胎兒もまた一個の人で、輕々しく手を下されざるのみならず、流産は母  
 體に對する危険もあり、且つ幸ひに手術は無事に成功しても、時として母體を救  
 へないこともあり、若しまた早きに失すれば、必要な胎兒を犠牲にすると云  
 ふ虞もあつて、旁々この時期の選定は醫家の大に苦心する所であります。

(四) 惡阻の原因

惡阻の原因は産科學に於ける三大謎語の一となつてゐて、何うして起るのか明  
 かに解つて居りません。併し妊娠に原因することだけは明かで、胎兒のために起  
 るとか、胎盤などのためとか、或は子宮が大きくなるためとか、種々様々の學說  
 がありまして、明瞭に確定して居りません。只初め神經質になることは明かであ  
 りますが、それも後には中毒の症候を呈します。それで今日の主なる說では、子  
 宮が大きくなるのが第一の原因となり、それが神経系に影響し胃の運動を起して  
 嘔かせると云ふ說と、胎兒、胎盤、卵膜、卵巢等から來る中毒によるとか、或は肝  
 臟の方から來る中毒に原因する等の中毒說とがあります。また或る學者は之を說  
 明して、初めは神經症で中毒ではないが、重くなると食物が食べられないために、  
 營養障害を起し、爲めに肝臟や腎臟等に故障を生ずる、而してこれ等の臟器はも

とく體内の毒を無害にし、若くは之を體外に排出する機能をなすものであるから、それ等に故障があれば、自然體内に毒が蓄堆して中毒を起す。即ち悪阻は初め神経症で起り、後に中毒となるのであると説いて居ります。然し私共は、最初より一種の中毒であつて、只臨床上初めは専ら神経症状を呈し、後に解毒機關又は排泄機關に著しい故障を起すに及んで、露骨に中毒の本性を現はすものと考えへて居ます。そして其毒は恐らく胎兒からか、或は胎盤（又は其基礎）から來るものかと思はれます。

(五) 悪阻の手傳をする病氣

悪阻の原因は兎も角、之が補因となつて手傳ひをする病氣があります。例へば、胃腸の悪い人、即ち胃癌、胃潰瘍、胃の位置の變動または生來胃の異状ある人、若くは便通が悪いとか、貧血症とか、十二指腸蟲病、腸胃の弱い人などは、

悪阻が重く。また子宮の位置の變化子宮粘膜炎の潰瘍、生殖器の腫瘍、其の他生殖器の種々の疾病ある場合には、従つて悪阻を増長せしめ、双胎兒とか羊水過多若くは葡萄狀鬼胎の時には、殊に性質の悪い悪阻を起し易うございます。また腎臟病、肺結核、喉頭結核、腦神経系の疾患、鼻の疾病等が存在するため、悪阻が強くなることもあります。それで悪阻の徴候があつて、少しでも重いつた時には、猶豫なく醫師の診察を受け、これ等悪阻を増長せしむる他の病氣がありはしないかを調べて貰つた方が安全です。これ等補因となる病氣を治療して、悪阻も共に治つた例は頗る多いものです。子宮の位置を直し、又は之が洗滌をなして、悪阻が治ることもあり、著しい例は灌腸をして通じをよくしたために、悪阻もですつかり治つたと云ふ實例もあります。

第十一章 不妊症およびその治療法

(一) 不妊の責任は男女共通

子供が出来ないと云へば、昔から一も二もなく婦人の罪のやうに考へ、子なき婦人は離縁してもよいとまで云はれて來ましたが、然し妊娠しないのは、婦人に責任があることもあり、また男子の責任に歸すべきこともあつて、不妊を以て直ちに婦人の罪とするのは、早まつた斷定と云はねばなりません。或る調査によれば不妊の原因中約三割は男子に關し、残り七割は婦人の責任に歸すべきものであるとのことですが、その婦人の責任に歸すべき原因の中の、子宮内膜炎、喇叭管の閉塞等は、多く淋毒性疾患から起るもので、普通の徑路から云へば、男子が疾病のために自から無精症となり、先づ自身に不妊の原因を作り、またその疾患を婦

人に傳染せしめ、爲めに種々生殖器内部の疾患による不妊症となし、男女双方に不妊の原因を作つてしまふのであります。

(二) 男子に存する原因

男子の方に存する原因中には、その精子が全く缺けて居ることもあれば、精子の数が極めて少數なこともあり、或は精子の活動力が極めて弱く、時として全く死んで居ることもあります。外國の或る學者の説によると、男子の四分の一乃至三分の一は、その精子に何等かの異状があると云ふくらゐで、日本人はそれほどではないやうですが、然し精子に異状のあるものゝ、案外に多いと云ふことは事實であります。

それで不妊の原因を調べるには、是非夫婦双方を調べて見る必要がありますが、若しその間に前後の順序を付けるとすれば、先づ割合に調べ易い男子の方を

調べ、然る後に比較的調べにくい婦人の方に及ぼすのが便利です。今日一概に婦人の罪のやうに考へて、先づ細君の方から先に醫師の所によこすのは、順序として如何のものでせうか。

(三) 婦人に特有な原因

シンブソンと云ふ學者の調査によれば、結婚後四年を経て初めて妊娠するのは極めて稀で、妊娠するものならば、それまでの内に妊娠するのが常ださうです。この點は我國でも同様で、三年にして子なき時はこれを去ると云つたのも、この種の經驗から産み出したものと思はれます。但しその不妊の原因は、必ずしも婦人に限らず、往々男子の方に存在することのあるのは、前に云つた通りです。不妊の原因に全身の故障から來るものもあり或は神経系統から來るものもあり、また生殖器の方面では、生來のものもあれば後に起るものもあります。この先天的

の原因には、兩性何れかの畸形の爲め、性交不能の場合もあり、或は後天的でも腫瘍その他の妨害物のために、同じ様な結果を來すことがあります。其他の後天的原因は、生殖器の組織が複雑なだけに婦人に多く、種々の點に亘つて故障が起ります。その第一は外陰部の異状で、瘻管性の疼痛があるとか、その他の異状があつて、性交の遂行を妨げることがあります。また膣加答兒のため、分泌物が酸性又は強度の亞爾加里性になると、自ら精子の生活力を鈍くするため、往々不妊の原因をなすのであります。また子宮が後屈するとか、腫瘍があるとか、或はまた子宮口が非常に狭かつたり、また全く閉ぢて居たり、若しくは子宮頸管に加答兒を起して、粘液の分泌が多く、ために精子の進入を妨げ、妊娠を不能ならしめることもあります。

比較的多い不妊の原因は、子宮内膜炎であります。子宮の内膜に炎症を起せば、喇叭管から送り出されて來た受精卵の附着を妨げ、または附着した受精卵を

育てるに困難で、往々流産となります。流産は子宮の先天的の畸形とか、位置の異状、または子宮内の腫瘍のためにも起りますが、最も多数なのはこの内膜の異状から起るのであります。而して内膜の異状は、普通花柳病に原因することが多く、殊に花柳病のためには、子宮のみならず喇叭管腹膜等をも侵し、往々生命に關する疾病ともなり、幸ひにして癒つたとしても、その癒痕的のものが一生生涯残つて禍をなすことがあります。

卵子の受胎する場所は、喇叭管の閉いて居る一端、漏斗部附近と看做されて居つて、そこで受胎した卵子は、喇叭管を通じて子宮に送られる筈であります。然るにこの喇叭管が疾病其他の原因で屈曲するとか、狭くなるとか、或はその粘膜が腫れて道が塞がるとか、若しくはまた子宮に接する口が閉ぢて居れば、折角受胎した卵子も子宮に達することが出来ずに、不妊に終らなければなりません。それも單に不妊に終ればまだしも、斯かる場合には往々子宮外妊娠となる恐れがあ

ります。この理由よりして子宮外妊娠は、多く不妊症または永く妊娠しなかつた後に、久し振りに妊娠した場合に起り易いものです。喇叭管の通路が全然閉ぢてあれば、精子の進入を妨げますから無論不妊の原因となります。

また卵巢に故障があれば、肝腎の卵子が出来ないので、不妊の主なる原因の一つとなつて居ります。その異状は多く卵巢が萎縮して、十分排卵することが出来ないか、または炎症を起してその表面が固くなり、卵子の撥き出される作用を妨げることが多いやうであります。其他卵巢や子宮などが、先天的に發育不全のため、不妊症を起すことも割に少なくありません。

(四) 不妊症の治療法

先天的に畸形のため妊娠しないものは、先づ多くは治療の道がありませんが、腫瘍などの妨碍物のある場合は、手術してそれを除けば、妊娠するやうになりま

す。膣瘻は神経的に来る異状で、處女膜に觸るれば非常に痙攣的疼痛を起し、性交不能の結果となります。それでこれを治療するには、處女膜孔を徐々に擴げるとか、或はまた處女膜の神経過敏の部分を、手術によりて除つてしまひます。膣の分泌物の異状は、それが酸性の時には亞爾加里性の液で洗ひ、強度の亞爾加里性のもは、中和させる方法を取り、或はまた異状分泌の原因の判つて居る場合には、根本的に原因に向つて治療を加へて癒すことが出来ます。通常は酸性のものも多く、重曹水で洗へば効力がありますから、若し他に格別の異状を認めずして妊娠しない場合は、素人手當として取敢へず、百倍か二百倍の重曹水で、就寝前洗滌して見るもよいでせう。

子宮口とか子宮頸管などの狭いのは、案外容易に擴げることが出来ます。若し子宮の位置の悪いために妊娠を妨げられる場合には、手術によつて位置をなほすことが最も確實です。姑息の手當ではありますが、醫師に頼んで假りに位置をなほ

し、矯正輪をはめて居れば往々妊娠することがあります。この場合は妊娠して相當の月數に達し、初めてそれを取りはづすものです。この位置の悪いために妊娠を妨げる所以は、必竟子宮口の位置が、妊娠の通路として不適當な状態に傾いて居るためですから、或る場合には性交時の臥位の工夫によつて、その缺陷を補ひ得ることもあります。その邊は醫師に相談すれば、よい工夫が無いこともありません。

子宮内膜の炎症に原因するものには、普通は搔爬術で治療されます。この手術は餘り億劫なものではなく、比較的簡易に出来るもので、この手術により妊娠した例は割合に多いものです。要するに卵子その物に異状なき限り、簡単な通過障りや附着障り、それ相當に治療の道がありますから、あながち失望するにも及びません。

尚ほ喇叭管が塞がつたやうなものは、手術によつて塞がつた口を開くことが出

來ます。普通内膜の搔爬も兼ねて行へば効果が多いものです。卵巢の發育の悪い場合には、近頃牛の卵巢から造つた薬を注射して發育を促がし、良い結果を得たとの報告もあります。全身の營養障礙が原因となつて居るものは、同時に多く無月經を伴つて居りますが、營養の恢復その他によりて、妊娠し得ることがあります。若しまた想像妊娠と反對に、精神的に不妊症に陥つたものは、また精神的に可能ならしむることも出來ます。唯だ特に注意すべきは、婦人の側の治療と同時に、男子の治療も忘るべからざることです。若し根本的に策を立てるとするならば、結婚に先だち健康診断を行ひ、男子の身體にも異状なきを確かめ、それを結婚の一條件とするやうになれば、大變都合がよからうと思ひます。

(五) 人工妊娠法

千八百六十四年マリオン・シムス氏が、人工妊娠法を初めて人間に試みて以來、

いろ／＼の人が試みて見ましたが、初めは兎角思はしい結果がなく、ポツシー氏に至りはじめて相當の成績を挙げ、十一人中の九人まで成功しました。その方法は直接腔内に入つた精子を、機械により子宮内の或る場所に送り、妊娠を助けるもので、これを行ふには綿密な注意を要し、先づ精子の數および活力に遺憾なきか、淋疾その他の病氣はなきか、卵巢、喇叭管、子宮等に異常なきか、分娩に際し通過障害はなきか等を確かめ、これに用ふる器具機械類はもとより、腔内に至るまで、精子に無害の消毒液を以て清潔に消毒し、且つ何れも體温に近い温度に暖める等、細心の注意を以て施術いたします。ポツシー氏は一人につき一回以上四回注射して成功して居りますが、我國ではまだ學術的に統計を示して、報告した人はいやうに記憶します。

第十二章 人工流早産術および避妊

(一) 産兒制限

産兒制限と云ふことは、近年著しく世間の注意を惹き、一の社會問題として論議されるやうになりましたが、この産兒制限を廣く解釋すれば、自からそこに二つの意味があつて、妊娠を未然に防ぐ避妊と、既に妊娠したものを正規の分娩まで待たず、これを中絶せしむる方法と、即ち豫防と消滅との二つの方法があります。

この妊娠を中絶せしむる方法の内にも、適當の理由なくして行ふことは、國法が刑罰を制裁として禁止する所です。然しそれを行ふ相當の必要のある場合、例へば狭窄骨盤のある婦人にて、十ヶ月の自然分娩を待てば、恐らく母の生命に危

険を來す恐れがあるとか、その他妊娠の持續が、明かに母體の危険を招くべき場合、例へば腎臟病、心臟病、結核、惡阻等の時に、所謂小の蟲を殺して大の蟲を助けると云ふ趣旨で、醫師が人工的に妊娠中絶術を施すことは、法律の許して居る所であります。

(二) 妊娠中絶術

然し社會政策的の理由、即ち子供が多過ぎては困るからと云ふ理由で、妊娠を中絶させることは、醫師にも禁じてあります。然し妊娠を欲せざる事情の婦人が妊娠した場合に、産婆の家などに寄寓して正規の分娩をなし、その子は子供を欲しがつて居る所に遣はすなどの事例は、常に見聞する所ですが、世間は案外廣いもので、眞に欲しくて貰ふ人も割合に多く、實際は都合よく融通されて、實子同様に愛して育てられて居るものが尠くないと聞きます。然しその一面には利慾の



ためにすると云ふ弊害もありますから、これは畢竟不完全な姑息な手段であります。従つて事實眞に不必要な子供であることが確實な場合には、寧ろ相當の時機に、流産術を許した方が良くはないかなど、云つて居る人もありますが、苟くも妊娠したる以上は、其胎兒は早晚一個の人格を得るものでありますから、之れを消滅せしむる事は、人道の上に於ても亦許すべからざることでありませぬ。

(三) 犯罪的の墮胎

醫師の行ふ流産早産術、即ち人工妊娠中絶術は、妊娠の初期に適法にこれを行へば、それに伴ふ危険も少なく、比較的安に行ふことが出来ませんが、之に反して、犯罪的に行はれる妊娠の中絶、所謂墮胎は、法律の嚴禁する所なるのみならず、醫師の方から見ても、恐るべき危険が伴つて居ります。その方法としてよく世間で試みられるのは、強度の通經劑を多量に服むことですが、今日藥として墮

胎特效藥は無く、流産だけに利く藥としては一もありません。若し強いて藥で流産の結果を見んとすれば、母體の生命に危険を及ぼすほど、多量の分量を用ひねば利目は見えません。それで醫師が人工流産の必要を認めて、妊娠中絶術を行ふ場合にも、そのために藥品を用ふることはいたしません。また近來陣痛を促がす藥として、牛などの腦の一部から製らへた良い藥が発見されて、それを注射すれば陣痛が強くなり起つて産が進みますが、然しこの藥も妊娠の中絶されつゝある途中には、分娩を促がす効力があつても、まだ分娩の氣のない人に用ひては、其目的を達することは出来ません。最新最良の藥でさへもこの通りですから、素人が藥品をもつて妊娠の中絶をはかるのは、徒らに母體の生命に危険を及ぼすだけで、無事に流産の結果を見ることは頗る困難であります。

また素人が機械的に、或る物を挿入して流産をはかるのも、位置の關係を知らずして、危険な場所に刺したり、或は偶然に適當の場所に入れたとしても、消毒

等が行はれないために、後になつて生命に關する病氣を起したり、または一生苦まねばならぬ婦人科病を起すことになりす。假りにこの消毒も完全に行はれたとしても、流産には往々内部に残るものがあつて、素人にはそれが分らずして、爲めに熱を起したり、或はまた出血などの障害もあり易いものですから、何れにしてもそれは母體の生命に危険を及ぼす、寒心すべきことであります。

(四) 避妊に就て

以上一旦妊娠したものを、中絶させることに就て述べましたが、母體の健康保護の理由よりして、初めから妊娠しないやうに、これを豫防することが必要な場合があります。避妊法はかかる場合の手段で、これを行ふべき場合と、否らざる場合とは、必ず醫師に相談して決すべきであります。その方法には姑息的方法と絶対的方法とがあつて、姑息的方法は行ひやすい代りに、その効果は頗

る不確實を免かれず、絶対的方法は或る奇蹟的の例外を除き、殆んど確實に妊娠を防ぐことが出来ませんが、その代りその方法も稍や臆切になります。姑息的ながら割合に行ひ易いのは、或る期間夫婦別居すること、統計上最も多く受胎するのは、月経閉止後十日間ですから、この妊娠の機會の最も多い期間だけ別居すれば、或る程度まで妊娠を防げる譯です。然しそれは唯だ妊娠の機會の多い期間を避けただけで、前に述べた通り精子は四週間位の生活力を有し、且つその入る機會は何時でもよいものですから、縦令妊娠の機會の多い期間だけ別居しても、その他の機會に入つたものが何所かに潜伏して居れば、新に入つたものと殆んど同じ價值がある譯で、旁々確實な方法と云ふ保證は出来兼ねます。その他姑息的方法として割合に効力のある方法もあり、また絶対的のものもあります。それは醫師と相談してその指揮を受けるが至當ですから、こゝにはこれを掲げないことにしました。

第十三章 流産の原因とその應急手當

(一) 流産の多い時期

妊娠八ヶ月以後十ヶ月の半迄のお産はこれを早産と云ひ、その生れた子は早熟  
嬰兒と稱し、不十分ながら兎に角生活力があつて發育しますが、七ヶ月に満たな  
いで生れた子は、普通生活力を有せず、發育しないものとなつて居ります。それ  
ゆる七ヶ月以内のお産を未熟産と云ひ、また流産と稱して、普通のお産と區別い  
たします。然し學問上では時として妊娠三ヶ月を標準とし、三ヶ月以内を流産と  
云ふことがあります。この場合には四ヶ月乃至七ヶ月未滿のお産を、特に失産  
と呼んで居ります。この區別は妊娠三ヶ月までは未だ後産が完成せず、お産の模  
様が普通と違ふ所から區別したもので、胎兒の形體は稍備はつて居りますが、無

論生活力もあらう筈なく、法律上の取扱ひも自から異なり、殊更に届出も要しな  
いことになつて居ります。この時期と次の時期との境界即ち妊娠三四ヶ月の頃は  
胎兒と子宮との附着力が最も緩い時で、一番流産の多い時期ですから、妊婦の危  
險時期として細心の注意を要します。

(二) 流産は普通のお産よりも危険

世人は一般に流産が、普通のお産よりも樂であると言ふ點から、之を輕視して  
その手當養生を粗略にする傾きがありますが、これは大變な誤解であります。  
成程流産の場合には普通のお産に比して、概して努力を要せず、痛みも強からず、そ  
の持續する時間も短かい様に感ぜられ、出血も通常少なく、産後の疲勞も輕いの  
で、世間で輕舉をするのも無理はありませんが、然し醫師の方から云へば、却て  
普通のお産よりも注意を要するのであります。之が十ヶ月を経た普通のお産であ

れば、生理的の自然の作用で、大多数は自然に委かせて置いてもよろしいが、流産となると既に生理的のものではなく、元來が何か間違ひがあつて、それに原因して起るものですから、これを自然に放任して置けば、その原因が増進して取返しつかぬことになることもあります。また稀には流産でも大出血を起し、貧血のために一命を失ふこともあります。尙ほ流産の時は後産が千裂れて残り易く、その爲め産後長い間出血が續いたり、或は熱などの出る患があります。今一つのことは、近時衛生思想が發達して、普通のお産の場合は、消毒等に細心の注意を拂ふ様になり、これに用いる材料等も、豫じめ殺菌消毒したものを取揃へて使ひますから、割合に危険もありませんが、流産の場合は多くは豫め用意した材料がなく、自然使用材料の消毒も粗略になり易く、又縦令適當の消毒材料があつても、前に申した理由で、凡ての取扱ひ法なども兎角輕卒にされ易い爲めに、産褥熱を起すことも多いのであります。此の産褥熱は可なり恐るべきものであります

て、幸に生命は助かつたとしても、後に種々の婦人科的疾患を遺し、その爲に一生涯苦しめらるゝ例が澤山あります。その他流産の後に「チンチ、オーム」と云ふ、悪性の腫瘍の出来ることもないではありません。それで今日の注意深い産婆は、流産の場合はその難易に拘らず、醫師に診せることを勧める位で、普通の産よりも一層用心すべきことを忘れてはなりません。

(三) 外傷に基く流産

流産の原因は種々雑多なものがあつて、誰れでも理解の出来る原因は、各種の刺戟であります。就中理學的殊に機械的の刺戟を云へば、外傷、墜落、転倒打撲、壓迫等で、井戸端で手桶を提げて轉んだとか、電車を下る時に落ちたとか、人に打られたとか、或は電車に足を轆かれて流産したとか云ふ類のものがあつて、嘗つて日比谷公園に於ける青島陥落祝賀會の時、三歳になる子供をつれ

た妊娠五ヶ月の婦人が、群集に押されながら子供を保護するに氣を奪はれ、前後から腹部を壓迫されるのを防ぎ得なかつたので、遂に即日流産した實例もありま  
す。これ等外力に原因する刺戟は、勿論腹部に加へられた場合ほど、流産の原因  
となることが多いのですが、然し腹部に遠い所に刺戟を受けた場合にも、反射的  
に流産を起すことがあります。例へば乳房に手術を行ふために、流産したと云  
ふ如き例もあります。然し外科手術をしても、必しも流産となると限らず、我々  
は妊婦の腹部を開き、直接子宮に大手術をも行ふて居ります。

(四) 機械的の力を以てする流産

産科醫が母體を救はんがために、殊更に流産せしむることがあります。例へば  
悪阻が極端に強いつと、或は子癩だとか、その他腎臓の疾患、肺結核、心臟病等  
で、妊娠を續ける時は母親が危ないと云ふやうな時には、寧ろ母體を助けるため

に流産せしむることがありますが、この場合には機械的の力を局所に加へて、流  
産させるのを常とします。勿論この場合には消毒や出血の手當等も十分届いて居  
りますから、危険は出来るだけ避けられます。

同じ機械的の流産でも犯罪的に行はるゝのは頗る危険で、今日でも地方により  
ては墮胎を罪惡と思はないで、慣行さるゝ所があるさうです。これ等は種々の方  
法を以て行はれますが、中には或る特種植物の根を用ひて局所を傷害し、以て流  
産を招くのがありまして、それが解剖の智識のない素人、又は素人に近い産婆に  
よりて行はるゝこととて、往々飛んでもない所を傷け、消毒上の手落ち等のため  
に、思ひの外の重體となつて醫師の所に來るものがあります。これ等の危険千萬  
なることは、前にも述べた通りであります。

(五) 暗に流産を教唆する賣藥

醫師が母體を助くるために、殊更に流産せしむるに當り、主として機械的方法を用ふるのは、一は今日母體に害なくして、流産のみを起さしむる適當の藥物がないからで、流産を招くに足るべき程の藥物は、多くは母體を害ひ、その結果母子兩方を死せしむるものもあります。然るに曾て狡猾なる商人は、月經を順調にする藥と稱し、妊婦は服むべからずなどと附記して、暗に流産の効能あるが如く廣告したものがありません。此種の賣藥はその筋の許可を受けた分量では、流産の効力なきは勿論ですが、時に秘密に手加減を加へ、許可の分量以上に有効危険なる配合をなして賣出し、ために所罰されたものもありました。故に此種の賣藥は、流産に對し無害無効であるか、さもなければ母體を甚だしく害し、以て流産の結果を見やうと云ふ、危険なものでありますから、何れにしても廣告の暗示するが如き効能は望まれない譯であります。元來月經の滯るのには種々の原因があつて、或る場合には月經がなくても心配はないことがあります。之を促がす藥

品もないではないが、確實な藥は稀ですから、若し月經が滯つたなら、その原因を究めて、それを除くべき療治を加へなければなりません。

(六) 流産の主因と誘因

妊娠中旅行をして、殊に汽車旅行や或は人力車馬車等にて、田舎道を揺られて流産することがあります。或は腹部腰部を冷したため、又は雪の中を歩いたとか、若くは坐浴、海水浴、腔の洗滌、冷水摩擦等により、流産を見ることがあります。これ等は單にそれのみを以ては流産の原因となるのは稀で、多くは他に流産の原因が存在して、偶これが誘因となるのであります。例へば、子宮内膜炎とか、子宮の發育又は位置に異状があるとか、又は腫瘤があると云ふ様な場合に、特別の刺戟を受けなければ妊娠が無事に経過出来るものを、偶々前に述べた様な刺戟を受けたために、流産となる場合も少なくないやうです。

その他梅毒などは流産の最も重なる原因で、軽いものは十ヶ月の妊娠を保つことが出来ますが、若しその間に旅行などをすれば、それが誘因となつて流産することがあります。重い梅毒になると先づ胎児が死んで、その結果何等の誘因なく早く流産となります。また母體が熱病にかゝるか、心臓呼吸器等に重患があれば、そのために流産を見ることもあります。精神的の刺激もまた時として流産を誘發することがあります。殆ど習慣的に流産する人には、多くは梅毒、子宮疾患等、永遠に亘る原因がありますから、その根本を治療せねばなりません。

(七) 流産の應急手當

妊娠と氣がついてから二三ヶ月経つて、下腹部が張るか、痛みを感じるか、若しくは少量にても血が下りた場合には、或は流産ではないかと云ふ疑を起して、直にその手當をせねばなりません。この場合には安静と保温とが何時も肝腎で、

つとめて静かに臥して、温かにやすみ、飲食物も滋養清涼のものを取り、一刻も早く醫師の治療を受けねばなりません。斯う云ふ状態を切迫流産と稱し、早く薬を用ふれば割合に防ぎ止むことが出来、いくらかも助ける方法がありますが、本物の流産となれば時既に遅し、醫師も却てその早く終了せんことを期する位で、防遏に對しては何等施す餘地がありません。此の場合産婦の注意としては、つとめて局所を清潔にすることと、絶對安静を保つことで、前後すべて普通のお産と同様にせねばなりません。若しまた大出血でもある場合は、醫師の来るまでの應急手當として、安臥のまゝ下腹部を氷嚢で冷して置かねばなりません。

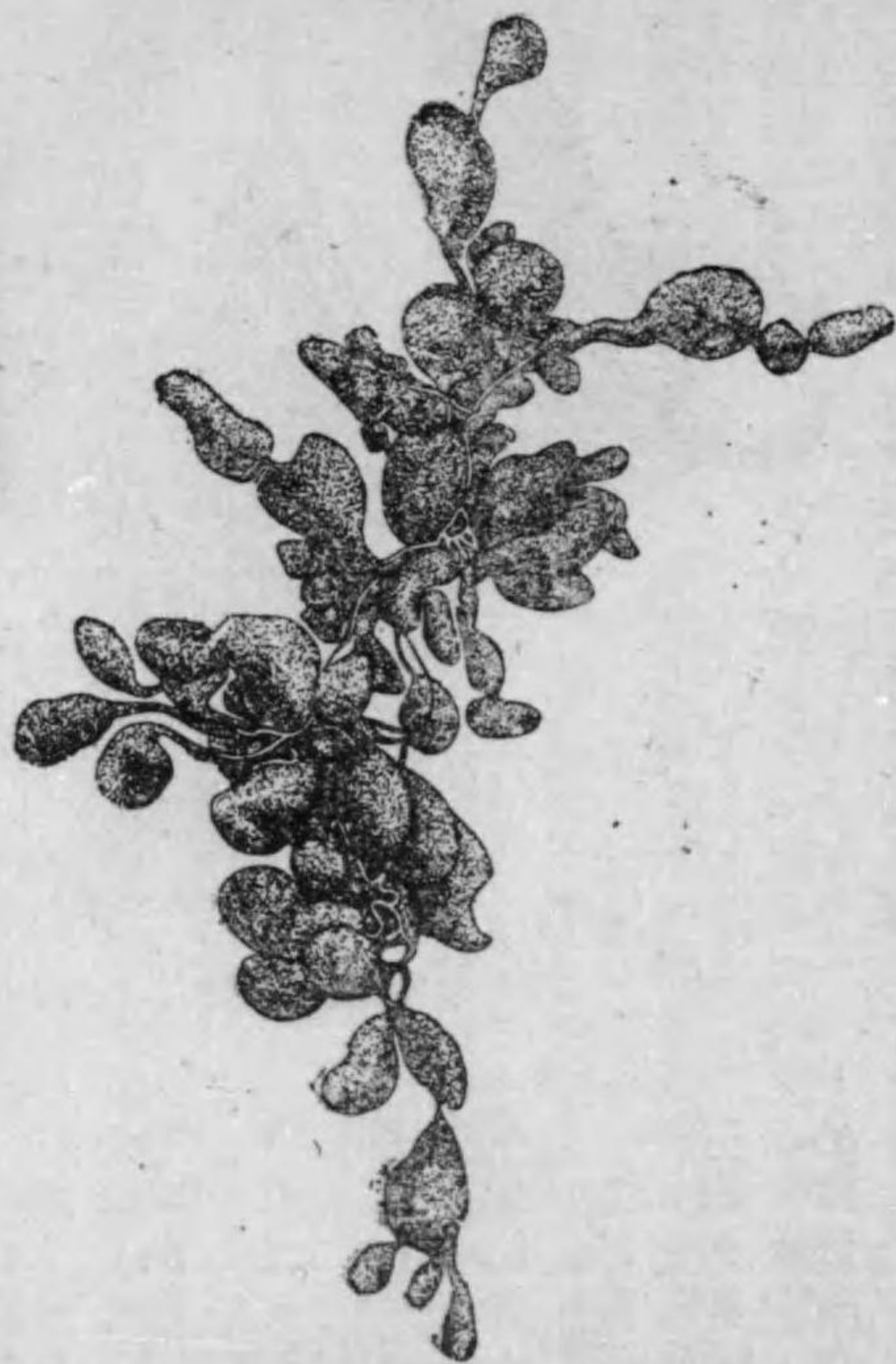
第十四章 妊娠中の出血

(一) 妊娠中の月経と流産

一旦妊娠すれば、出血を見ないのが普通ですが、前に述べたやうに、時に妊娠の初期一ヶ月乃至數ヶ月に亘り、月経の日取りに周期的に出血を見ることがあります。これは通常別に憂ふるほどのことありませんが、然し原則としては妊娠中には出血しないもの、その出血には危険の伴ふのが常で、殊に妊娠の前半期、即ち五ヶ月以内に出血のあるのは、多くは流産の一症候と見てよい位ですから、妊娠中に出血を見た場合は、兎に角一應は醫師の診察を受くべきものです。

(二) 葡萄状鬼胎

圖 四 第



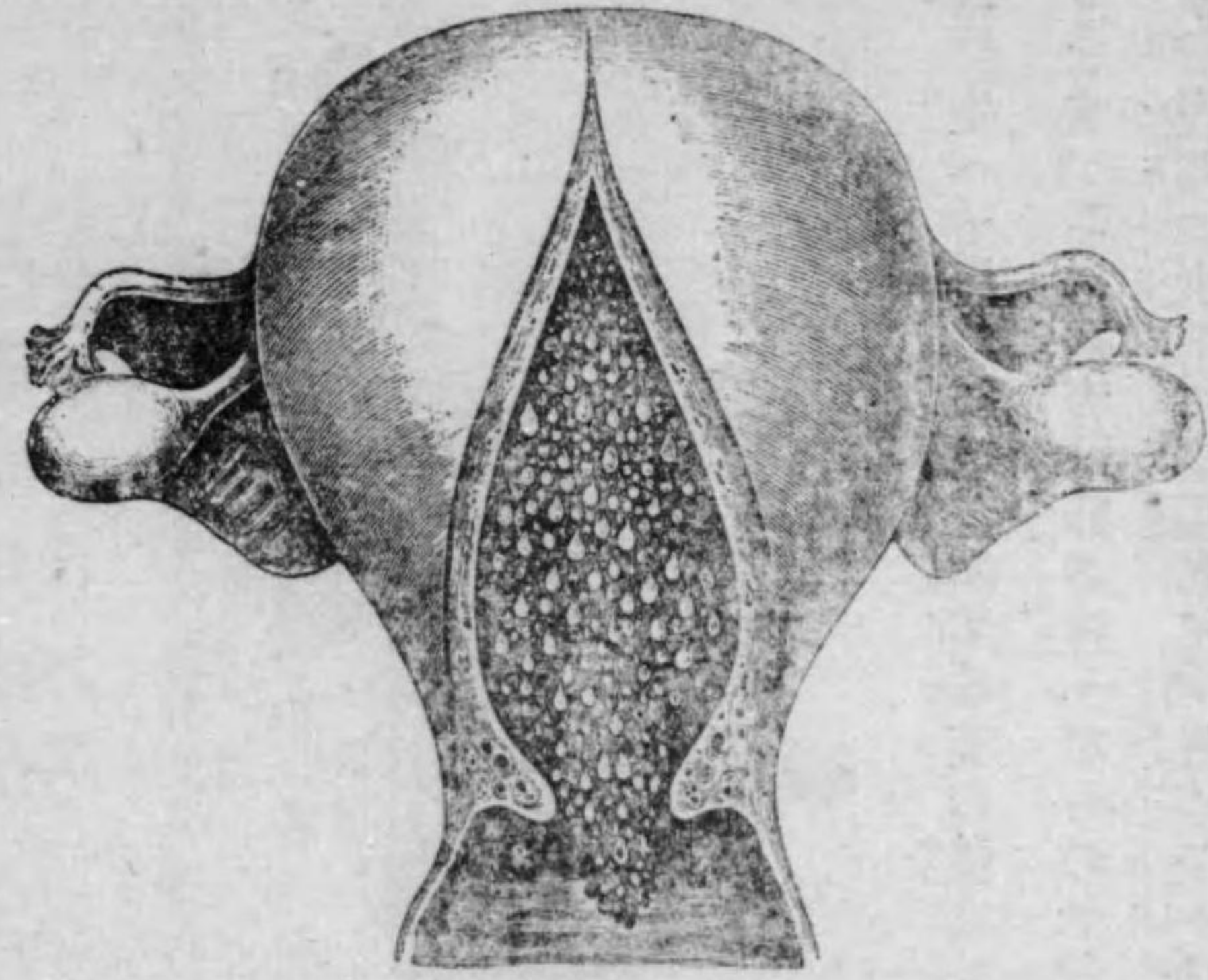
示を胞囊の胎鬼状葡萄

周圍に生へて居る絨毛と稱する毛の様なもの、それが葡萄のやうになります。その發育は頗る速かなもので、どんく繁殖して恰かも鰾卵のやうになり、腹部は次第に膨脹して、妊娠三ヶ月位でも六ヶ月位の大きさとなります。内

時には普通の流産でなく、葡萄状鬼胎のため出血する場合があります。葡萄状鬼胎とは、胎兒を包んで居る卵膜に起る一種の病氣で、卵膜の



圖 五 第



す示を胎鬼狀荷葡てし斷縦を宮子

ります。そしてその出血が何に原因するかは、醫師でなければ分かりませんから、

部に於てはその葡萄状の水腫れが子宮腔内に充滿し、従つてそこに宿つた胎兒は、爲めに死亡して、多くは妊娠の早期に起りますから、大抵胎兒は軟化吸収されて其形態をとゞめず、素人目には、胎兒其ものが葡萄状に變化したかのやうに見えます。

この葡萄状鬼胎が出来ると、三四月頃に出血して、そのために危険な結果を伴ふことになり

兎に角出血を見た時は、診察を受ける必要があります。また葡萄状鬼胎は出血に伴ふ危険のみならず、お産が済んで一度かたが付いて後に、暫らく経つてから、悪性脈絡膜上皮腫と云ふ、癌腫に劣らない悪性のものが出来ることがあります。その治療は癌腫と同じく、早期に手術して取り去るより外はありませんから、葡萄状鬼胎が出来たら、少くも半年位は時々醫師に診せねばなりません。

(三) 子宮外妊娠

喇叭管その他子宮外に妊娠した場合には、その局部が既に妊娠の繼續に不適當の場所ですから、勢ひ二三ヶ月にして破裂したり、若し腹腔に近い所に妊娠した場合には、腹腔内に向つて流産します。この子宮外妊娠の破裂とか、腹腔内への流産の時には、當然腹腔内に多量出血して、爲めに卒倒し顔色蒼白となり、同時に子宮の方からも幾分出血するもので、子宮を経て外部に出血するのは、憂ふる



（妊 娠 管 卵 輸）妊 娠 外 宮 子 圖 六 第

程多くないが、腹腔内部に出血するのは恐るべき結果となります。この場合妊娠と氣付いて居て、出血と同時に相當の手當をすればよいが、妊娠を知らずに居て、突然腹痛を起して卒倒し、顔色蒼白となり、あわて、醫師の診察を乞ひ、月經閉止の事を云はなかつた爲め、腸筋頓とか腸捻轉と誤診された例もあります。婦人が急に卒倒したり蒼白となつた時は、醫師の質問なくとも月經の閉止して居たことを、進んで告白するのを忘れてはなりません。

(四) 胎盤の早期剝離

妊娠の後半期即ち六ヶ月以後に出血するのは、多くは胎盤の早期剝離で、その剝れた所から出血するものです。其中には普通位置の胎盤が剝れて出血するものと、前置胎盤のために剝れて出血するものと二様あります。

胎盤は普通子宮の上の方に附着する筈のものです。それが時として下の方に附着することがあります。これを前置胎盤と云ひます。妊娠が進んで末期に及び、子宮の下部が段々伸びて来る場合に、前置胎盤ですと勢ひ胎盤が剝かれて、出血することになります。若し妊娠中に剝離せずに経過しても、分娩に際し子宮口が開くために、自然剝離出血して、危険なことになります。この場合には時として胎児を犠牲にせねばならぬこともあります。かかる場合には剝離した創面が外部に近いために、細菌も勢ひはいり易いものですから、特に安静を保ち清潔に

せねば熱の出る虞があります。前置胎盤の豫防としては、先づ内膜炎の治療を完全にする事です。が、兎に角出血の時は、必ず醫師に診せねばなりません。

正常位の胎盤も、時に早期剝離で出血を起すことがあります。これには種々の原因があります。妊娠中で云へば、腎臓炎があつたり、熱病に罹つたりするとよく早期剝離を起し、内膜炎のある時に

圖 七 第



盤胎置前てしに娠妊胎双

も剝離することがあります。また壓迫、轉倒、打撲、震盪等からも起り、人込みの中に押されて剝離を起すこともあります。何れも剝離の結果は流産又は早産となります。分娩に際しては、お産が急に進んで臍帯が引張られ、そのため早く剝離されることもあり、或は陣痛が強過ぎるために剝離されることもあります。それで陣痛の餘り強過ぎる場合には、早く醫師を招くが安全です。

(五) 其他の出血

その他妊娠中に筋腫、癌腫、贅肉、静脈瘤の破裂、子宮内部の糜爛、その他の異状により、出血することもありますから、少量の出血でも必ず醫師の診察を請ふことが必要です。

第十五章 双胎は左程稀でない

(一) 双胎の出来る理由

双胎は割合に少なくないもので、何人もその親類とか知人とかの間に、必ず一  
二の例を見る位に多く、凡そ八十回のお産に對して、一回位の割合になつて居り  
ます。品胎になるとその割合はずつと少なくなり、双胎の割合を自乗したもの、  
即ち六千四百回のお産の中で一回位のものです。要胎周胎となると極めて稀なも  
ので、それ以上は我國には未だ例を見ません。曾て亞弗利加で生れた七子の寫真  
を、新聞の挿畫で見ましたが、恐らく稀有の例と見ればなりません。

双胎の出来る理由に二つあります。その一は一卵性双胎と稱し、一つの卵子に  
二つの精子が入つて出来る場合で、他は二卵性双胎とて、二個の卵子に各々別個

の精子が入つて、受精した場合に双胎が出来ます。一卵性双胎の場合、卵子が  
一個ですから、従つてそれが子宮内膜に附着して發生する胎盤も、亦た必ず一個  
で、胎兒も性を同ふし、男ならば共に男、女ならば何れも女の子です。之に反し  
て二卵性の双胎の場合は、二個の卵子が各々所を異にして、内膜に附着せるた  
め、従つてそこに二個の胎盤が發生し、且つ胎兒の性も同性と限らないで、時に  
性を異にし、男と女と出来ることもあり得る譯です。

双胎は多産の傾向ある人に多く、また初産よりも経産婦に多く、且つ多少遺傳  
的の關係もないではありません。従つてまたたび／＼双胎を生むこともあり易い  
譯で、同一婦人が双胎を重ねたりすることもあり、稀な例ではありますが、二十  
七回の分娩で、五十九人生んだと云ふ例もあります。一體に多産の傾向ある婦人  
に多いものですから、双胎を生むのは何れの方から見ても、目出度いこと祝すべ  
きことで、何等恥づべきことではなく、或る時代には褒美の出たことさへありま

すが、それを我國では古來、やゝもすれば間違つた考へや、一種の迷信の様なのが附纏つて、一般にこれを恥とし、産婆も亦た産婦の精神的影響を恐れ、成るべく産婦に秘せんとする者もありますし、殊に胎児が性を異にする場合など、往々その一人を「お返し」するとして、殺した時代さへもあり、左もなくとも、生後その一人を邪魔者扱ひにする例なども見聞します。双胎の原因の分らなかつた時代には已むを得ぬとしても、今日ばかりの誤つた考へや迷信は、須らく一掃せねばなりません。

(三) 双胎に起る故障

双胎の診断を受けて非常に心配する人がありますが、然し實際はそれほど心配するにも及ばぬものです。唯だ双胎の場合には單胎に比して、障害の起り易いと云ふことは、一般に注意すべきことです。それは第一腹が大きく、腹の形も單胎

と違ひ、普通の妊娠中に當然起るべき障害、例へば腰の痛みや足がつれたり、排尿時の障害、胃部の壓迫、呼吸苦痛などが殊に強く、普通二百八十日を待たず、大抵數日若くは數週間早く生れるを常とします。そして豫定日まで保つたとしても、胎児の發育は單胎の場合より小さく、且つ血行その他の關係から、發育に不同があり勝ちのもので、昔時はこれを見て、妊娠後更に新たに宿つたものと考へられたこともありました。時には双胎の一角が發育せず、妊娠経過中に死亡した場合に、他の胎児の發育のため、次第に壓し潰されて扁平くなり、紙兒と稱する紙狀胎兒となり、分娩の際に出て來ることもあります。

分娩時に於ては陣痛が弱く、お産が長引くこともありますし、或は一子が娩出した後で、子宮が收縮し、胎盤が剝れるため、他の胎児に危険を及ぼすこともあり、又は分娩時に至り胎児の位置が變り易く、産後の子宮收縮が悪くして、弛緩性出血を起すこともあり、子疝、腎臓炎なども起り易いものです。それでも通常

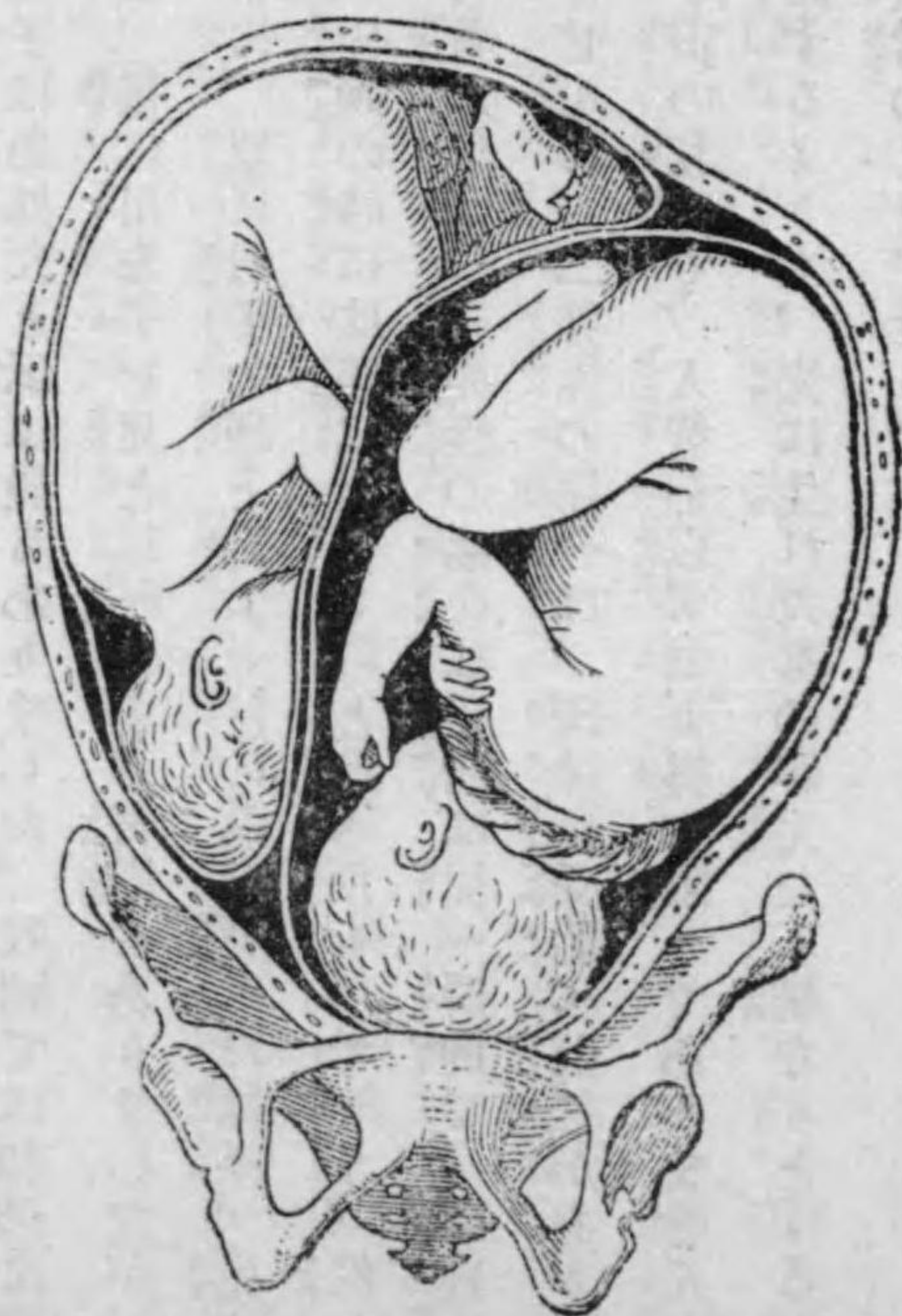
心配するほどのことはありませんが、妊娠中または分娩に際し、時としてかゝる障害が起り易いものですから、双胎の場合には醫師の監督の必要が特に大なるものがあります。その際醫師がついて居れば、相當の豫防も出來ますし、また切迫せざるに先つて、危害を防ぐことも出來ます。

(三) 双胎娩出の順序

分娩時に異状の起り易いと云ふ外は、特に双胎だから分娩時の通過が困難だと云ふことはなく、位置の異状さへなくば、胎児が小さいため、却つて安々と生れるものです。通常は一人が生れて、次で第二の子が生れ、その次に後産が出るもので、第一の分娩との間隔は、十分乃至三十分間位のものです。尤も時には第一子が生れて、まだその始末の出來ない内に、續いて第二の子が生れることもあり、稀に例外として數日間の間隔をあくこともあつて、外國の或る工場では、

爲めに同一女工の分娩手當を、月に二回出して、一時問題となつたと云ふ實例もありません。斯る時は一旦閉ぢた子宮口を、更に新たに開いて生れますので、自から二度の分娩となる譯です。双胎の分娩の際、産婆は第一子と第二子とを識別するため、何か目標を附ける筈ですが、その何れを兄とし姉とし、何れを

第 八 圖



胎双る取を位頭に共

弟とし妹とするかは、周の時代から二説ありて、議論のあつた所です。或はまた支那では、双胎児の胎内にあるや、自から主副の別があつて、發育よく大きい子は兄弟で、小さな子は弟妹だと云ふ説もありました。我國では初めに生れた子を弟とし妹とし、後に出た子を兄とし姉とする習慣もありましたが、惟ふに卵子のことを考へずに、單に男子の種と云ふことのみを考へた結果、先に入つたものが奥にあつて、分娩の時には後に出るものと考へたものでせう。然し前述双胎の出来る理由から考へれば、一卵性の場合には受胎は同一瞬間で、學理上前後を論ずる餘地がありませんし、二卵性の場合には、理論上受胎に前後があり得るとするも、その順序は宇宙の秘密で、人智を以て知り得る限りでありませぬから、従つて受胎の前後を論ずるよりも、先に生れたものが兄たり姉たりとするが、今日の學理から云へば至當のこととせう。

(四) 双胎の診断

双胎の診断は時に困難なこともあります。胎児の頭などが二つあつて、心音も二つ聴へる場合は断言されますが、それは何時も分るものではなく、殊に腹壁が緊張したり、羊水が多い場合には、中々分らぬことが多い、また單胎と同じくらの腹で、經驗ある醫師が診て單胎と見たものが、意外にも分娩になつて見ると双胎であつたと云ふ様なこともあります。然し腹が割合に大きい時には、一應双胎の疑ひを以て診察を受け、羊水過多か、胎兒過熱か、將た經産婦たるが爲めに大きいか、或は双胎かを確むる必要があります。



(婦人壽草)

分  
挽  
篇



第十六章 お産になるは何時頃か

(一) お産の日取

お産は何時頃あるかと云ふことは、妊婦にとつて重大な問題ですが、これは普通妊娠の持続日数から計算されて居ります。即ち満足に成熟した児の生れるのは早くて二百四十日、遅くとも三百二十日以内のもので、平均して見ると、二百八十日前後のものが最も多数であります。それで今日の學理では、二百八十日を以て妊娠の持続日数と假定し、その期の満つる日に於て、分娩が起るものと推定することになつて居ります。

然しこの二百八十日の第一日は、妊娠の眞實の初日ではありません。妊娠が果して何れの日に成立したかと云ふことは、今日の知識を以てしては、到底發見す

ることが出来ませんから、便宜上成るべく妊娠の成立した日に近い或る時期を選んで、その時から起算するのであります。妊娠成立の日に最も近いと認めらるゝ事實は、即ち最終の月経でありますから、最終月経の第一日から起算して、二百八十日目にお産があるとすれば、最もよく中るのでございます。これを計算するには、最終月経の第一日より四十週の後と勘定してもよく、或は二十八日を一の妊娠月として、その十ヶ月の後としてもよろしいが、もつと簡便に計算する法があります。即ち二百八十日は太陽曆の九ヶ月と四日乃至七日に相當しますから、最終月経の第一日の月と日に九ヶ月と七日を加へ、その現はれた月日がお産になる日と知るのであります。例へば最終月経の第一日が一月一日であるとするれば、一月に九を加へ十月を得、一日に七を加へ八日を得、十月八日がお産のある日で、若し三月二十五日であつた場合は十二月三十二日即ち翌年の一月一日が分娩の日と知るのであります。月に九を加へて十三月とか十四月とかになる時は、そ

れから十二ヶ月を引くかはりに、初めから三を引いた方が簡便であります。例へば、四月八日が最終月経の第一日ならば、四より三を引き八に七を加へて、翌年の一月十五日とするのです。

(二) 妊娠は最終月経の後に成立する

妊娠の成立は最終月経の前か後か、換言すれば、眞の妊娠持續日数は、右の二百八十日より長いか短いかと云ふに、最終月経後直に結婚して、その儘妊娠が成立した實例が少くない所から見ても、眞の妊娠持續日数は、二百八十日以下であると云つた方が至當であります。之は月経の學說から考へても亦同様であります。月経と云ふものは前に述べた通り子宮の粘膜が四週間毎に變化を起し、その結果子宮出血を見るのであつて、粘膜は出血のある一週間乃至十日前から肥厚くなつて充血し、何時受胎卵が來て種殖しても差支のないやうに待設けて居ります。その

時に受胎した卵子が來て此所に種けば、肥厚した粘膜は直に應用せられて、胎兒を養ふに適當な状態となり、その部は胎盤となりますが、若しも卵子が來ないか又は來ても受胎して居なかつた時には、その準備が無駄になり、充血は潰れて月経となるのでございます。それゆゑ妊娠すれば爲に出血を見ず、妊娠せざれば出血すると云ふのであつて、或人は月経は妊娠せざる證據で、即ち一種の流産だとさへ云つて居ります。

然るに夫と別れて後一度月経を見、その後妊娠したと云ふ例もあるから、妊娠の成立は月経の後とは限らないと云ふ議論もあります。然しかゝる事は一種の例外であつて、精子は能く四週間の長い間、婦人の體内に生存して居たと云ふ實例もありますから、前の例の如きは、精子を收得したのは月経前で、月経後に至り初めて妊娠が成立したものと説明することが出来ます。殊に動物には交尾後永い時期の後に受胎する例が澤山あります。

また妊娠の後に至り、月經にあらざる出血を見ることが往々ありまして、妊娠第一月又は第二月までこの種の出血を見ることは珍らしくありません。これ等は前に委しく述べました通りであります。此點から考へても、夫と別れて後胎經を見て妊娠したと云つても、強ち不思議とは申されません。勿論此の場合の月經は、眞の最終月經でありませんから、其日から起算すると、分娩豫定日に間違を生ずることになります。

(三) 最終月經の不明のとき

お産になる日は、普通最終月經の第一日より起算しますが、若しその日を忘れたとか、又は不順のためにその日を定め難いやうな場合には、胎兒の動いたのを初めて感知した日から算出することが出来ます。多くの場合には、それより二十週の後に分娩するものでありますから、その感知した月日に四ヶ月と二十日を加

へた暦日が、即ちお産のある日に相當します。例へば四月一日に始めて胎動を感知したならば、八月二十一日頃を分娩豫定日とするのです。但し之には遅速があつて、月經から起算するよりも不確實であるし、また經産婦は早く感ずるも、初産婦は遅く感ずることあり、或はまた腸の運動を誤認することもありますから、確かな算定法とは申されません。

若しまた精子を収得した唯一の日が、明かに判つて居る時は、その日から起算して二百七十日乃至二百七十六日、稀には二百八十何日と云ふ例外があります。平均二百七十三日の後にお産があると見れば大抵中ります。これも輕便法に従ひその月日に太陽曆九ヶ月を加へて出た日を、分娩の日と知るのでございます。例へば一月一日に夫と會合して、其前後數ヶ月の間は其様な事がないとしたならば、分娩豫定日は十一月一日とするのです。

今一つの算出法は、妊娠の終期になると胎兒が下降して、心窩部の所が大變樂

になりますから、その時から起算して、凡そ三週間の後にお産があると思つてよろしいです。

### 第十七章 お産の近いのは何らして判るか

#### (一) 妊娠期陣痛

お産がいつ頃になるかは、お産の支度や入院その他の關係から、大體の見當をつける必要がありすが、前述の豫定日の推算の外、次の容態からもお産の近づいたことを氣附くことが出来ます。斯る徴候を見たらば、妄りに外出せず、早産の癖でもある人は、遠方に行かず、動作に注意し、妊娠中の注意を一層慎重に守り、何時でも差支のない様に準備にかゝらねばなりません。

子宮は妊娠の末期に近づくほど収縮し易く、自分の手で觸つて見ても固く感ずるほど緊張し、分娩に近づくほどその緊張の度も著しくなり、終には運動とか刺戟とかゝなくても、軽い疼痛をさへ覺ゆる様になります。これを妊娠期陣痛と

云ひます。眞個の陣痛は分娩が始まつて、後からくと起り、最初は間隔が遠いながらも、大體規則正しく繰返しますが、妊娠期陣痛は起つたかと思へば永らくやみ、發作も不規則で且つその持続も短かいものです。通常十月に入ると起り、多くは分娩數日前に起りますから、一にこれを前驅陣痛または豫備陣痛とも云ひます。尤もこの陣痛が分娩まで繼續せず、その儘で一時休止することもあります。が、兎に角この陣痛を感じたならば、最早近い内と心得て、それく諸般の準備にかゝらねばなりません。

### (二) 位置の變化

十ヶ月に入れば、今まで骨盤の上に動いて居た胎兒の頭部が、骨盤の入り口に固定し、鳩尾の邊りまで高くなつて居た子宮底部は、子宮が前方に突き出すため、次第に下つて行くのを感じ、鳩尾の邊りが窮屈に苦しかつたのが、次第に樂

になつて來ます。この子宮が下るのを初めて感じてから、約三週間位を経ては産があると、大體の見當をつけてよいことは前に述べた通りです。初妊にありては、臍の凹みが全然無くなるか、または臍が突出した時が即ちその時です。

### (三) 尿意頻繁

妊娠四ヶ月前後になれば、子宮の大きくなるに従ひ膀胱を壓迫する關係から、一時尿意頻繁となりますが、それが六七八ヶ月には止んで、更に九ヶ月十ヶ月になれば、今度は胎兒の頭部で膀胱を壓するため、再び尿意が頻繁となり、殊に十ヶ月に入ると目立つて繁く、且つ排尿が稍や困難を覺へます。これも産の近づいたのを知る一の徴候です。

### (四) 胎動の減少

胎児がだん／＼成育して、末期に近づくに従ひ、胎児に對する羊水の割合が少くなる關係から、却つて胎動を感ずること少くなりますが、殊に十ヶ月に入れば、前述の如く子宮が緊張し、胎児の位置も固定するため、胎動も著しく少くなるものです。

(五) 下り物の増加

妊娠すれば幾分下り物が増すのが普通ですが、末期になるほど一層増して、分娩一二週前よりは著しく増加するものです。これも亦たお産の近づいたのを知る一の徴候です。

また今迄妊婦の體重が増して來たものが、びたりと止まれば、間もなくお産になると思ふてもよい。その他胎児の大きさ、子宮口の模様、その他の状態で知る方法があります。それは醫師産婆の範圍に屬し、一般の人は知る必要はありません。

第十八章 愈よお産になつたのは何うして判るか

(一) 規則正しい陣痛

分娩開始の徴候として著しいものは、先づ規則正しい陣痛が起ります。人により多少違ふこともありすが、十分おきとか十五分おきとか、一定の規律を取つた間隔で陣痛が反復して、その持続時間も通例十五秒とか二十秒くらゐ續きます。時に其一つ／＼の痛の發作や間隔に、多少の不規律があつても、總括的に規則正しい陣痛が反復すれば、分娩の開始したものと見ねばなりません。尤も偶にはこの陣痛が中止し、數日間も休むこともあつて、前章の豫備陣痛と選ばない様なこともないではありませんが、通常は概して一定の規則正しい時間をおいて起り、分娩の進むに従ひ、その間歇時間が短かく、陣痛の發作が次第に頻繁となつ

が發作的に起り、上から下の方へ張つて、殊に腰の方へ繰り返へし張つて來た時は、分娩は開始して居るものと知られます。この發作の間隔がだん／＼短かく、その持續時間が長くなるにつれて、分娩はいよ／＼進んで居るものと見ねばなりません。

て來るものです。同時に産婦自身に、胎兒の頭部がだん／＼下つて、骨盤内に下つて行くを感じ、また幾分か血の混じた様な、粘液性の下物があれば、明かに分娩の開始したことを知られます。

(三) 無陣痛でもわかる

右は普通の場合の徴候ですが、時に例外として一向痛も起らず、下物の血も混らず、僅かに腹が張る位で、子宮口がだん／＼開いて來て、眞個に痛みを感じずる時には、最早分娩は大に進んで居て、俄かに狼狽することもありません。骨盤の廣い婦人には往々かゝる安産を見、多少遺傳の關係も認められます。尤もこの種の分娩でも、全く上述の徴候がないではありません。子宮口の開くのは、子宮の收縮と弛緩とが反復するによつて開くもので、注意すれば疼痛はなくとも、この弛張の反復を感知することが出來ます。即ち前述の陣痛は感じないでも、子宮の緊張

第十九章 何時産婆を呼んだらよいか

(一) 遠慮は無用

分娩開始の徴候が見えて、愈よ分娩が始まつたと氣附いたならば、縦合まだ間があると思ふまでも、一應は産婆を呼ぶのが至當です。中には餘り早く呼ぶのは氣の毒だからとて、成るべく切迫するのを待つ人もありますが、斯る遠慮は無用のことで、若しお産に間があると見れば、産婆は一應歸る筈ですから、兎にも角にもお産が始まつたと見れば、直に呼ばねばなりません。産婆の都合から云つても、早く知らせて貰つた方がよく、また同時にかけつけの醫師があつたら、聘ぶ聘ばぬに拘らず、分娩開始のことだけを通知して置けば、いざと云ふ時に手廻しよく運んで好都合です。

(二) 産婆の来る迄の注意

分娩開始の徴候として、發作的に痛みが強くなるとか、下物に血を混ぜるとか、前章に述べたことや、その他の徴候によりて、分娩開始らしく感じた時は、假りに産婆を呼ぶと同時に、日常の用事を廢して安靜にし、殊に腹壓の加はる様なことを禁じ、いきむことのない様に注意せねばなりません。何となれば中には格別痛まないお産もあつて、まだくと思つて居る時に、お産は案外進んで居ることもありますし、素人がよく云ふ「産婆も間に合はないほどの安産」と云ふのは、實は危険の多いお産で、産兒が卵膜を被つて居るとか、或は羊水を飲んで居るとか、産婆が居れば相當の手段を講じ、當然助けることの出来ることも、産婆が居ないために危険なことになる易い。また産婦に對しても、かゝる早いお産の時は、會陰其他に傷の出来易いもので、殊に弛緩性出血などは、この種の所謂輕



いお産殊に經産婦に多いものです。一般に初産だから醫師を頼む、入院すると云ひますが、實際は斯る軽いお産こそ却つて多く醫師の必要あり、産婆の間に合はないお産こそ、却つて危険の多いものです。實際に於てはこの種のお産でも、無事に済むのがあるとは云へ、無事なのは寧ろ僥倖と云はねばなりません。

産婆を招くと同時に種々のお産の準備を要するは勿論ですが、殊に寒い時は必ず火を起し、湯を沸かして置くことが必要です。産婆が来てお産には間に合つたとしても、室が寒くて産兒を冷やすやうなことがあつては不都合です。また湯が沸いて居れば、縦令お産には間があるにしても、何かにつけお湯の必要がありますから、早くても無駄にはなりません。

## 第二十章 お産のための入院

### (一) お産の介助者

お産は普通の病氣とちがひ、生理上當然あるべき筈のもので、本來は他人の介助がなくとも、獨りでに自然に済む筈のものです。人類の進歩するにつれて次第に重くなり、他の介助を必要とする傾きがあります。今日でも未開の土人の間には、産婦自ら川邊の人なき所に行き、木などにつかまつてお産をし、産れた嬰兒は水で洗つて、ちやんと始末をして歸つて來ると云ふのがありますし、同じ日本人にしても労働者などの中には、その朝まで車の後押しをして居たものが、忽ち産氣づいて無雑作にお産を済まし、翌日からまた仕事をすると云ふやうな、極端なものもあり、結婚後二十年間に十五度お産をして、而もお産の翌日にはいつ

も店番をしたと云ふやうな人もあります。然しこれ等は極く軽いお産で、誰でも斯やうに軽いと云ふ譯には行きません。殊に歐羅巴人などは、その儘放任して置いても、通常のお産になるべきものを、他人の介助を借りるものはまだしも、生理的に起る自然の苦痛を恐れて、態々兎角非難のある無痛分娩を行ふものがあります。

お産に際し他人の介助を必要とする否とは、人種にもよりますし、また平素の生活状態にも大いに關係があつて、一概に云ふことは出来ませんが、我國中流の婦人の分娩に就て云へば、他の介助なくして獨りでお産が済むと云ふことは、思ひもよらぬことで、少くとも産婆なしでは、お産は出来ないものと云はなければなりません。

(二) 萬全のために醫師を要す

最新の教育を受けた産婆が附いて居れば、大多数の場合には差支ありませんが、偶に例外として産婆だけでは間に合はず、是非とも専門醫の助けを必要とすることがあります。それも分娩に際して起る故障が、他の病氣のやうに時間の餘裕のあるものならば、産婆が先づ異状を發見して、直ちに醫師を招くことも出来ますが、お産には臨時に突發する故障が多く、例へば産後の出血の如き、やつとお産が濟んだと喜んで居るうちに、突然大出血を起し忽ち頻死の状態に陥ることがあります。また産れた嬰兒が何の異状もないものが、急に危険に陥ることもあります。斯る場合に直ぐ隣家に醫師があつて、それが必ず宅に居るものとすれば、間に合はない限りでもありませんが、世の中のことは常にさう都合よく行くものではなく、如何に早くても二三分の時間はかゝるものと見なければなりません。その内には最早手遅れとなつて、醫師が駆けつけた時には、手の下しやうがないと云ふ場合が往々あります。勿論今日の産婆には、或る程度まで斯る場合

の處置を教へてはありますが、然し注射をするとか、機械を用ふるやうなことは許されて居りませんから、産婆が異状を發見して、直に醫師を招いたのでは、往々時機を失して、一人ならず母子二人までの生命を失ふことがあります。故に萬全のために、異状の有無に拘らず、お産の總ての場合に専門醫師を招くのは良い事でありませう。無論多くの場合には單に監督するに止まり、實際醫師が手を下すことは稀れですが、その代り異状があるとなれば、傍に醫師のついて居たほど安全であります。

(三) 産婆本位と醫師本位

米國の多くの州には、特別に産婆と云つてはなく、妊婦は初めから醫師が診て、愈よお産となると、特にお産に經驗ある看護婦を選び、醫師の手傳ひをさせるので、主たる介助者は醫師がいたします。我國では從來妊娠五ヶ月になると産

婆に診せ、産婆は月に一二度廻つてその経過を見、若し異状ありと見れば、豫め醫師を勧めたものでしたが、近來は大事を取る人は、産婆の勧めがなくとも専門醫を頼むとか、或は一層進んで外國風に先づ専門醫に診せ、然る後に産婆を選びと云ふ風が、漸く多くなつて來ました。即ち産婆本位から漸く醫師本位に遷り醫師の監督の下に産婆が取上げると云ふことになりつゝあります。お産に時間の餘裕のない突發的の危険が伴ふ以上は、斯くなるのが當然のことでありませう。

(四) 往診と入院

産科醫が往診する時には、大抵の異状には差支ないだけの荷物を携へて、機械を入れた大きな鞆を持つて行きますから、大抵のことなら往診先で處置が出來ますが、稀には到底處置の出來ないことがあります。例へば子宮破裂の如き、人手が足らず又た消毒の不完全な座敷では、とても手當が出來ないことがあります。

また消毒の如きも、如何に嚴重に行つて見ても、病院ほど完全には出来ませんから、旁十分のことを云へば、産院病院に入院すに越したことはありません。近年産院病院に入院して、そこで産をする人が漸く増加して来たのは、矢張り世間が永い間苦い経験をして来た結果でありませう。

(五) 初産婦と經産婦

世間では初産だから入院の必要がある、二度三度と経験を つめば、それに及ばないやうに思ふ人が多い。これは大變な誤解と云はねばなりません、初産の時の異状は、通例通過障害が多く、腹壓陣痛の異状、肉の産道が開かぬとか、骨盤が狭いとか、または胎児の發育が過大であるか、若くは位置が悪いとかに原因して、産道の通過に障害が起つて、その結果娩出が出来ないか、または娩出するにしても時間がかかり、そのために嬰兒が死ぬるとか怪我が出来たりしますし、母

體にあつては、子宮破裂産褥熱等を起し、殊に三十歳以上の高年初産にありては、子宮口その他の通路が開き悪く、その危害が著しくなります。然しこの種の通過障害に對しては、それ〴〵の手當があつて、素人が心配する割合に危険の少ないものであります。經産婦にあつては、通常通路は容易ですから、やゝもすれば油斷があり勝て、醫師の方から云へば、經産婦ほど異状が多いものです。就中最も恐るべきは産後の大出血で、お産の輕ければ輕いほど起り易く、且つ豫期されずに突發し、突嗟の間に危険の状態に陥るものですから、是非手近に醫師が居なければなりません。斯う云ふ點から云へば、經産婦ほど入院の必要が多い譯です。勿論これ等の異状は例外で、普通は入院して警戒したことが無駄にはな

(六) 産院に入院する時期

るが、萬全のためには入院するに越したことはありません。